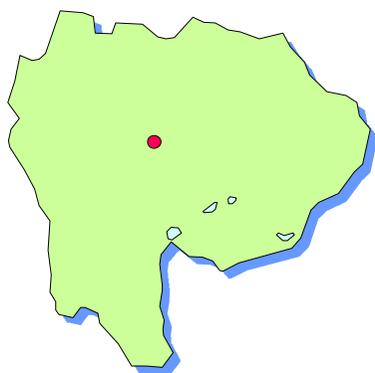


ドキュメント 山梨県一周駅伝物語！

甲斐市チーム一年の軌跡



この話はノンフィクションです。すべて
実在の人物及び団体名です。どこかに
勘違いがあったらごめんなさい。

おもな登場人物

Aチーム

- 内田 聖**
双葉中2年
見た目のおとなしさとは違ったガッツある走りが売り。可能性を感じさせる走りはこれからがとても楽しみだ。小さくまとまらずに目標を大きく持て！
- 村田 彩音**
玉幡中2年
こちらのミスで、サブがいない状態で当日までを過ごすというプレッシャーを与えてしまったが、きちんと粘りの走りはしてくれた。まだ2年だ、今年頑張れ！
- 大沢 正和**
甲斐市陸協
社会人2年目となり環境も少し良くなったので、春から練習会に参加出来るようになり、回を重ねる毎に力が戻った。秋になってからは山田、下山、岩澤、草間の他チームのエースと互角に走れるまでになった。楽しみながら続けていこう！
- 小田切 崇**
東洋大3年
箱根は残念だったが、優勝を狙う層の厚いチームの中で最後までメンバー争いに残ったレベルの力は発揮してくれたと思う。流れを変えられる選手として自覚もあり、魅せることの出来るランナーだ。就活もあるが、あと1年頑張れ！
- 石原 和希**
山学大2年
5区に関しては毎年1分ずつ短縮していくという驚異の伸びを見せている。29分台には驚くとともに鳥肌が立った。甲斐市始まって以来、初の総合トップに躍り出るという快挙を成し遂げてくれた。感動をありがとう！
- 岩瀬 史明**
甲斐市陸協
笹子峠越えを10年連続という節目の年に、出来れば花を添えてやりたかったが悔しい結果となった。しかし若い菊島とのバトルは見る者を熱くさせ、決して諦めない走りは若い選手の見本だと思う。7区で迎えた関係者は知っています！
- 柳 一哉**
甲斐市陸協
移籍1年目で意欲的に練習をこなし、調子が上がってきた11月に腰に違和感が出て最終調整を難しい形で迎えなければならなかったのは本当に残念だった。闘志むき出しの走りは見ていて気持ちがいい。そんな中でも甲斐市新記録でした！

- 菊池 努**
甲斐市陸協 かなりの日数をインドで過ごし、それでも練習は休まなかった社会人ランナーの手本。この大会を『楽しいイベント』ととらえ、チームのムードを盛り上げてくれる存在。去年のリベンジをしっかりと果たし、更なる可能性を残した。ガッツ！
- 串田 優大**
山学附2年 今年はケガや病気に苦しみ、高校生として個人もチームも結果を残す事が出来ずに1年を過ごした。新たな『優大作り』に向けてしっかりと積み上げて行け。2日間連続で走った経験は必ず生きてくる。最後の年に飛躍することを願う！
- 小池 宣夫**
甲斐市陸協 去年は絶好調で迎えたレースで思うように走れず、今年はなかなか上がってこない体調での16分台の走り。若手の手本としてこれからも楽しみながら続けて欲しい。年代の選手にスピードでは絶対負けないのだから。
- 山口 はな**
甲斐市陸協 就職試験もあり、年明けからあまり練習出来なかった時期もあるが、その後はきちんと練習会のポイント練を使って作り上げてきた。希望していた公務員になり、晴れて春からは社会人です。みなさん品行方正にしましょう！
- 清水 誠二**
甲斐市陸協 今年はフルのタイムも2時間35分台となり、スタミナには絶対の自信を持っての登場だった。気象条件のせいか思うように身体が動かなかったが、ラストの走りはしっかりと意地を見せてくれた。まだまだ工夫次第で伸ばせます！
- 小林 拓磨**
東京理大3年 4年目の今年は初めて2日目のみに出場。堀内の頭の中にはスーパーサブの構想もあったが、それを吹き飛ばす気迫で笛吹の市川と激しい戦いを繰り広げ、手塚の区間賞のお膳立てをしてくれた。背中から感じる気根に声が震えました！
- 手塚祐太郎**
山学附1年 駅伝日本一の中学生から、更に競争の激しい高校陸上界で飛躍を目指す。高い意識と冷静な目で自分自身の改造にも成功して、これからは飛躍の時だ。身体作りを中心に一段ずつ階段を上がっていけ。今のフォームでトップまで行けます！
- 新海 賢一**
甲斐市陸協 『大砲新海』がアンカーにいることで、選手が諦めることなく走れる安心感。他チームにとっては脅威となる存在でありつづけてくれている。この距離で区間2

位を1分以上離してしまう走力は凄すぎる。若い選手を叱咤激励して下さい。

Bチーム

- 鵜沢 剛史** 玉幡中3年 やはり力が拮抗していたために直前に出走が決まり、先生方には大変苦勞をかけた。高校でも続けるというので来年は絶対Aで走れるように頑張れ！
- 中村 友紀** 双葉中2年 陸上部ではないが持って生まれたスタミナが駅伝に生かされ、なかなかの好走でした。部活ではなくても駅伝は続けて欲しいいい素材です。
- 橋本 拓也** 農林高1年 去年は1区で好走し、今年はAでのメンバー入りを期待していたが、なかなか思うような結果が残せずBでの出場となった。1年生で2区間は厳しかったと思う。
- 岡田 武仁** 甲府工3年 高校1年からメンバー入りはしていたが、出走出来ずに最終学年となった。Bでは不本意だろうが、B発足の切っ掛けとなった本人だ。大学で頑張るって必ずAで。
- 松永 竜旺** 甲府工1年 中学の時から練習会、合宿と参加して高校1年で新人陸上3000SCに勝つなど、一気に伸びた。意欲的に練習しているので今後を楽しみにしている。
- 杉田 辰幸** 甲斐市陸協 農林高OBとして、コーチ兼任の相山の同級生として長い付き合いをしてきた。厳しい区間配置に黙々と挑み、初めてのBチームを引っ張ってくれた。
- 石水 大地** 甲府一1年 松永と同じで中学からずっと参加している。普段がほとんど1人練習の為に練習メニューなどの相談はしている。向上心はあるので化けるのを期待している。
- 高橋 郁弥** 韮崎定2年 夏からドラゴンで一緒になり、練習会に参加させて少しずつレベルを上げてきた。長距離には適正があり、試合度胸がつけばもっともっと走れるはずだ。
- 飯野 潤二** 甲斐市陸協 言わずと知れた『ドラゴンの主』。平気で50周をしてしまう病的ランナー。ハケ岳年代別2位で、全国的にその強さを認知された。まだ先があるぞジョニー！

小栗 愛美 みぞれ混じりの悪条件の中、最後までよく粘って走りきった。高校駅伝よりも走
巨摩高1年 りのリズムが良く、いい経験になったと思う。試合はいつも見えています！

矢嶋 千明 一般区間を、と言われてもひるむことなく走りきり、見事につないでくれた。さ
甲斐市陸協 すがに年期の入った50代である。若い選手は見習うものがかなりあるぞ。

本田 拓也 メディアの取り上げがいくつもあったので、本人は意欲的に取り組めた。それを
県立ろう3年 自分の力に出来る明るさが伸びしろを感じさせる。もっと上まで行くぞッ！

榊原 智広 寡黙な性格そのものの走りで、黙々と走りきった。まだあと1年ある。強いチー
農林高2年 ムにいることを誇りに、高校最終学年をしっかりと頑張れ！

清水 光夫 久しぶりの県一周駅伝登場。優勝テープを切ったことも区間賞を取ったこともあ
甲斐市陸協 るコースに帰ってきた。甲斐市で無ければ代表になって今でも走っていたはず。

A監督車のスタッフ

清水直樹
堀内利満
長坂正時
末木真悟
小林拓司（ドライバー）

B監督車のスタッフ

増田康彦
保坂敏浩
相山 賢
山口まな
登川哲哉（ドライバー）

甲斐市の関係者のみなさん…

他チームの選手、関係者のみなさん…

練習会&富士見合宿参加のみなさん…

その他大会関係者のみなさん…

沿道90万県民のみなさん…

ほんとうにありがとうございました。 ペこり！！

700-7 その1…

12月13日 夜明け前…

あまり寒さを感じない朝だった。ここしばらく、毎朝霜がおりる澄み切った天気が続いていたが、今朝は柔らかな空気の匂いだった。

ほとんど明かりのついていない、しんと静まりかえった住宅街を抜けて、歩いてシルバー自動車に向かった。見上げると5時過ぎの空には色がなく、どんよりとした群青色だった。早朝の散歩だろうか、前方から歩いてきた中年夫婦が、大きなバッグと黄色い大型メガホンを抱え、首から提げた二つのストップウォッチがジャラジャラ鳴るおいらを見て、ギョッとしたように驚いて通り過ぎた。

歩きながら、いつものように選手全員に『おはようメール』を送った。明日の19区のラストを逆進するので、上り坂をフウフウ言いながら歩いていくと、前方から来た車から「ホリウッさん、おはようございまーす、小田切がもうバンバン走ってましたよォ」と声を掛けてきた。Bチームの相山だった。到着する頃には、寒さに備えて厚着をした身体が温まり汗ばんできた。

先週は、遅れてやって来た寒波のせいで一気に寒くなり、1週間後の天候を気にしたりもしたが、これならば何とか持ちそうな気配だった。

小林宅に上がり、お母ちゃんが出してくれたリンゴをほおぼりながらお茶を飲んでいると、選手からのメール着信音が鳴り続けていた。柳と優大の腰の状態は少し気になったが、一昨日の練習会でのポイントでは問題なかったので、ホッとしていた。中学生、高校生、大学生や社会人も、本番の朝に、「長年の夢を叶えましょう」「最後まで粘ります」「ホームページ見てポルテージ上がってきました」「集大成にするつもりです」「今年は何故かプレッシャーがありません」「しっかり後ろから見ていて下さい」「絶対トップでタスキをつなぎます」いろんな言葉が踊っていたが、『チーム力で勝ちましょう』メールが一番多かった。ここ数日、携帯とPCのメールが日に70~80件を越えていた。

選手たちとは、1年通していろんな形でコミュニケーションを取っているので、10代から50代まで知らない選手はいなかった。それが甲斐^{うち}の売りだし、個々の力で勝てない分はスタッフ、関係者を含めたチーム力で勝負するしかないのだ。

「ホリウッさん、また今年もこの日が来ましたねえ、私が走る訳じゃないのに、いまからもうドキドキですよォ」

お茶を入れてくれたお母さんが、いつもの笑顔で話しかけてきた。

「いつもすいません、甲斐市で4回目、何だか今年は風がうちに吹いてる気がするんだよね、今日が獲れればいけると思う、流れ次第だけど、初めてタスキがつながる気がするんだよね、甲斐の走りで、後半も甲府といい勝負しますよォ」

12月1日の監督会議で配布された1日目の出走表を見ながら、何度も何度も繰り返したシミュレーションを思い出した。それぞれの選手の走りが脳裏に浮かび、ガッツポーズをしている笑顔がいくつも見えた。他チームの戦力分析はほぼ完璧に終わっていた。下山を中心に大学生と高校生の粒が揃っている甲府が、頭ひとつ抜けている状態だった。3連覇中の南アAは、何人もいる実業団選手が登録されていないのを確認して、充分勝負出来ると踏んでいた。練習会や合宿で一緒になる社会人や、高校、大学の選手の構成は、久しぶりに手も足も出ないという感じではなかった。中村、岩澤の社会人を中心とした笛吹Aは、つなぎの区間や女子、アンカーに不安を抱えていた。

北巨摩の時代から10数年、何度も勝てそうな雰囲気を抱いたことはあったが、どこかに相手のミス待ちという気持ちが存在していた。今回は、甲斐がミスなく走れば行けるんじゃないかという、かなり余裕のある状態でレースを迎えた。もちろんそれが、とても難しいことはよく分かっていた。去年大活躍したキャプテンの勝保が、仕事の関係で春からほとんど練習出来ず、登録だけに終わってしまったのが返す返すも悔しいが、それでも個々のレベルアップでチーム力は格段に上がっていた。

「みんなで2日間楽しみましょう、じゃあ、出かけまーす」

坂下のコンビニに相山の車があり、増田監督を始め、保坂、相山、Bの手伝いを頼んだ山口と、揃って車から降りてきた。末木、長坂のAチームのスタッフと合流し、県庁へ向かう。

山梨県庁中庭にて…

一番乗りで県庁の駐車場に車を入れた。まだかなり薄暗く、遠目では人の顔は判別できなかった。東からうっすらと夜が明け始め、藍色の山肌がハッキリと見えてきた。この時間帯からグッと気温が下がり始めた。

明るくなってしばらくすると各チームの車が次々にやって来て、あちこちで年に一度のいつもの会話が始まっていた。おいらはお母さんとやって来た1区の内田と一緒に、再度コースの確認に出かけた。

「この上り坂でしっかり走る、トンネルの手前から歩道に上がるから、集団でいたら、うまく前

に出ろ、いいな」

「はいッ！」

愛宕トンネルを抜けて、ラスト1キロ地点と中継所を確認して戻ってきた。だいたいのレース展開予想を話すと、いい意味の緊張感を漂わせて返事をした。それを聞いて、今朝のメールの返事と同じで、最後まで粘れるだろうと感じた。(それにしても、役員の誘導ミスで車道を走ってしまったのには驚いた)

双葉中の武井先生がやって来て、内田の面倒を見てくれた。山梨市代表で走る孫の深沢^{ゆう}のそばには串田さんがいた。

「おはようございます」

「ホリさん、優の面倒見たら、すぐに優大を送るからね」

「大丈夫ですよ、優大は9区だから、まだだいぶ時間があるじゃないですか」

練習会にも年間通して来てくれる串田さんは、そう言ってそばでストレッチをしている優を見ていた。今年は選手宣誓を頼まれて、小学生の時から平然と県記録を出していた優が、いつもより下を向く回数が多かった。終われば大丈夫だろうと思って心配はしていなかった。

「優、宣誓さえやっちまえば力が抜けて、リラックスできるぞ、なッ」

「はいッ、頑張ります」

相変わらずはにかんだ笑顔で返事をしていたが、気持ちは宣誓の文言に集中しているようだった。小学生の時から3年間、緑ヶ丘まで送迎しているお母さんと、しばらく話してからスタッフの所へ戻った。

南アルプスや笛吹市、北杜市、甲府市、山梨市、中央市、大月市と、知ったメンバーが次々に声を掛けてきた。お互いに笑顔で笑い合っていたが、まだメンバー表の提出前なので、ある意味探り合いの時間帯だった。練習会や合宿、県内のレースで一緒になる南アルプスは、いつもの雰囲気とは明らかに違い、甲府のスタッフには緊張感があるのを見逃さなかった。ここまでできて出来る事は何もないので、あとは祈るだけだった。

早朝から入社していた直樹さんが、会社から直接やって来た。Aチームのスタッフが全員揃い、やっと戦いの準備は整った。メンバー変更用紙に4区の誠二を小田切に替え、初日申請書を本部に提出した。

「宣誓ッ！ われわれ選手一同は、地域の名譽をタスキに託し…」

甲斐市Aは開会式の並びが中央付近にいたので、深沢^{ゆう}の宣誓を目の前で聞いていた。思ったた

よりも長く見事な宣誓に、前列にいる各チームの監督たちは左右を見てお互いに「凄いな」という目配せをしたりしていた。よどみなく終わると落ち着いて自分のチームの列に戻った深沢は、小さく笑みを浮かべていた。

「いつもより、ちょっとだけ^{ぬく}温といですかねえ…」

両手をこすりながらの野口大会会長の挨拶は、いつもながらユーモラスで、場の雰囲気をもっとさせた。場内のピリピリしたムードをほんの少しだけ落ち着かせた。



「パーンッ！」

早朝の静まりかえった甲府市の中心街に、芦沢副知事の号砲が響き渡る。若鮎のような中学生ランナーが勢いよく、一斉にスタートラインを蹴った。

中央線の陸橋はあっという間だ。今年はYBS文化

早朝の県庁前を勢いよく飛び出して、2日間172Kmの長い長い戦いが始まった！

会館の前で車を止めてもらい、**1区**の写真を撮ってから愛宕トンネルへ向かう計画だった。

「内田ッ、いいぞ、その位置で楽に行けッ、リラックスして行けよォ」

「自信持って行け、前半は集団でいけば大丈夫だぞ」

「ファイトファイト、いい感じだぞォ〜」

先頭集団の後方で落ち着いて通過する内田に、みんなで声を掛けた。

「鶴沢ァ、力むな力むな、上りきったら粘るぞ」

「そのまま集団で行け、しっかり前を追うぞ」

Bチームの鶴沢に声を掛けてから車に飛び乗った。始まったばかりだが、すでに自分の心臓の音が聞こえるくらいに高鳴っていた。裏道を走り、北バイパスまで急いで上がっていった。

「よしッ、まだまだ、あの位置なら大丈夫だ」

「内田ァ、そのまま付いていけェーッ」

武田通りを右折して平坦になると、上田（西八・南巨）と松田（南ァA）が肩を接するように激しい競り合いを繰り広げ、1年生の上田（甲府）、そして平賀（韮崎）、深沢（山梨）、安達（北

社)に続いて内田が現れた。激しい息遣いととも白い息を撒き散らしながら前を追う姿勢を見



珍しく牽制のないスタートからの激しいトップ争いが始まった

せて、内田は愛宕トンネルの中に消えていった。おいらは芯の強い意志のある目をしていたのを見逃さなかった。

「鶴沢ア、こっからだぞォ、」

「しっかり粘っていこう、そうそう気持ちで負けるな」

少し後方に下がった鶴沢に声を掛けた。

沿道の応援が凄く、反対車線からのおいらたちの声はかき消されそうだった。

「内田、いい走りだね、前とはそんなに差

がねえし、流れはいいよね」

「うん、後半粘れるタイプだから、いい位置で渡せると思うよ」

車の屋根から顔を出した直樹さんとおいらは、そう言って前方を眺めていた。

今年は、なかなか甲斐市の中学生のレベルが上がらずに心配していたが、秋になって玉幡、双葉、敷島ともに、少しずつ3000m9分台が出現し、先月の中学駅伝で内田が1区を9分10秒で走り、2区の伊藤も9分16秒というタイムを叩き出してホッとさせてくれた。その日に武井先生に、2名のAチームでの登録のお願いをした。2人とも2年生というところに可能性を感じさせ、特に双葉中は、メンバーのほとんどが1～2年生というチーム構成で初の関東切符を手に入れ、更にこれからの楽しみを与えてくれた。

「甲斐市、頑張れーッ！」

「もう少しだぞう、ラストラスト」

トンネルの出口の広場には大勢の関係者が待ち受けて、地元の選手に大声でゲキを飛ばしていた。前とのタイム差を知らせる人、残り距離を伝える者と、それぞれ思い思いに叫んでいた。

「内田ア、ラストラスト、残り1キロ切ったぞ、前もバテてるぞ、行ける行ける」

「トップはまだあそこにいるぞ、最後まで粘れ粘れ」

強い視線で前の走者の背中を凝視し、内田は苦しみの中に飛び込んでいった。宣誓で力を使い果たしたのか、小学生の時から甲斐市の練習会に参加している山梨市の優が、すぐ前を走っていた。同じ2年生だ、負けるな内田、声に出さずに強くつぶやいた。

内田は初出場でもひるむことなく走りきり、村田の待つ旧堀内石材前の中継所に続く下り坂へ

走り込んでいった。

「よし、やった、いいタイムだ、10分台だ、こりゃ優大と同じくらいだ」

おいらは止めたストップウォッチを見て叫んだ。

「内田ァ、ご苦労さん、よくやったぞ、10分台が出てるぞッ」

「いい走りだったぞ、ナイスガッツだった」

中継所を通過しながら、走り終わったばかりの内田にみんなで声を掛けた。順位は7位だが前との差もあまりなく、なによりこの区間で3年連続の10分台はなかなかのものだった。春先には心配していたスタート区間が、いい滑り出しとなってスタッフ一同ホッとした。鶴沢（玉幡中）も後半粘って、13位でBチーム初のタスキリレーを終えていた。

^{あやね}
「彩音、楽に行け楽に、そういいぞ、リズムよくな」

「前が見えてるから大丈夫、しっかり追うぞ」

2区の村田（玉幡中）も2年生で、中学駅伝の走りで出場を決めたのだが、こちらのミスでサブがいなくなるという際どい状況になってしまっていた。樋川、樋両先生には大変な思いをさせてしまったが、故障することもなく当日を迎えることが出来て、心底ホッとしていた。2チームにした無理がこんなところにも出た格好だが、これも強くなるための試練だろうか。

「いいぞ、前が近づいてきたぞ、リラックスしていけよ」

「下り坂は楽に楽に、そうそう自分のリズムで走れ、ナイスナイス」



軽やかなフォームで走り込んで来た2区の彩音

前の古屋（山梨）を追って目線ひとつ動かさずに、村田は淡々と走り続けた。もちろんプレッシャーはあるだろうが、そういう雰囲気をはほとんど感じさせず、束ねた長い髪を左右に揺らしながら軽やかに下ってきた。去年まで2年続けて先輩の奈帆が走っていたので、これで3年連続玉幡中からの代表選手だった。

「前に前に、しっかり相手の背中を見ていけよ、気持ちで負けるなァ」

「自分のリズムで行け、ソーソーイチニィイチニィ、いいぞッ」

始まったばかりでレースが落ち着かず、激しく入れ

替わる展開を関係者も持て余していた。中学生の2区間は、力の差というより、その日の体調によって順位が入れ替わってしまうことの方が多かったからだ。

11月2日 櫛形競技場 県中学駅伝…

決勝審判を依頼されて、トラック内の中継所前に中学、高校の先生たちと一緒にずっといた。参加校が多く、特に1～2区への引き継ぎなどはほとんど団子状態で来るので、タスキ渡しの直前で順位が入れ替わることが多々あり、大変な役目だった。

練習会に来ている中学生も多数参加していたが、それより、甲斐市の中学生区間の代表を誰にするかで頭がいっぱいだった。こっそりとタイムを取ったりしては、可能性のある選手の走りをチェックしていた。

先に行われた女子では、隣で審判をしている山梨南中の樋先生のチームが、1区から、6→3→2と来て、ついに4区でトップに立つという展開で、審判席は大変な騒ぎになった。強い順に並べたんです、という先生の言葉通り、アンカーでかわされてしまったが、2位でフィニッシュするとはほとんどの関係者が思ってもいなかったはずだ。

「手が震えてうまく書けませんよ」

3区辺りから、そんなことを言っただけで目を細めていた樋先生だった。村田は1区で粘りの走りを見せ、目の前で見ていたおいらはすぐに、県一のAチームでの登録を先生にお願いに行った。

男子はずっと練習会に来ている韮崎西の初優勝の呼び声が高かったが、1区から思うような流れに乗れず、4位から2位を行ったり来たりして、5区ではついに5位に落ちてしまい、アンカーの平賀が意地の走りで2位まで上げたが、それが限界だった。見ていて、惜しいというより、悔しい準優勝だった。

「彩音ッ、ガマンガマン、ここで粘っていけ」

「頑張れーッ、彩音え、あと少しだよォ」

玉幡中学の先生や生徒、先輩や関係者などもやって来て、前を追う村田にあちこちで声援を送っていた。葉を落とした銀杏並木の下を、村田は諦めずに前を追った。

明るい陽光が足元を照らし、歩道の上に厚く積もった銀杏の葉がキラキラ輝いていた。後方からやって来た力のある小田切（南アB）が、猛スピードで村田や横内（韮崎）たちを抜き去り、一気に先頭集団に迫ろうとしていた。村田は後半に吉岡（笛吹A）にかわされたが、落ちてきた吉沢（西八・南巨）を抜いて走り続けた。

「さあ、ラストラスト、しっかり最後まで腕振って走れ、そういいぞ」

「中継所見えたぞ、大きく大きく、ソーソー上がったぞ」

村田は最後の力を振り絞って、手を挙げて呼んでいる大沢の待つボルドー前の中継所に飛び込んでいった。先頭は相変わらず南アAが名取の安定した走りで独走状態に持ち込み、なんと南アBの小田切が区間新記録の爆走で、6人を抜いて3位に上がり、毎週うちの練習会に功刀が連れてきている古屋（山梨）が、区間3位の好走でチームを2位まで押し上げる健闘を見せた。

「よし、よく頑張ったぞ、彩音お疲れさん」

「ありがとう、よくつないだぞォ」



Bの中村（双葉中）は前後にランナーが見える位置でよく踏ん張り、村田を少し上回るタイムを叩き出して13位のまま橋本に中継した。

「前が見えてるから、大沢は走りやすいんじゃないかな」

「こりゃ去年と同じ展開だね」

おいらたちは中継より少し早く通過して、後方を振り

レースは中盤だ、このまま強気で押していけ！ 返って**3区**の展開を見つめながら話していた。

「大沢ッ、慌てなくていいぞ、今年は自信持って行けッ！」

「前は見えてるからな、お前の走りをすれば大丈夫だ」

大沢は車の上のおいらと直樹さんを見上げてから、しっかり顔いて、力強い蹴り足で前との距離を徐々に詰め始めた。ここからの一般区間は、上位浮上へ欠かせない原動力になるメンバーを揃えていた。

「今日の大沢はいいねえ、足の動きが去年と違うもん」

おいらの方を見て、直樹さんが嬉しそうに話しかけてきた。確かに後ろから見る大沢は、脚の返しも速いし蹴りの力強さもある。それは、しっかりと練習を積んで本番を迎えた確かな証拠であった。

職場の関係で、前よりはほんの少し練習時間が取れるようになった。3月まではほとんど来ることのなかった練習会に、頻^{ひんぱん}繁に参加できるようになり、週毎にレベルを上げて、春には歯が立たなかった下山や岩澤たちと、秋には互角の勝負をするようになった。あちこちのチームのエースが集まっているとはいえ、あくまでも『甲斐市の練習会』であるということ意識して、ど

んなにキツくても常に設定ペースで引っ張り続ける^{きがい}気概を見せてくれた。ラップを読むこちらが嬉しくないはずがない。

「よし、さあ近づいたぞ、このまま押して行こう」

「しっかり流れを作るぞ、あとは小田切と和希に託せばいい」

本人の心の中に、去年のリベンジという気持ちが大きく働いていると思っていた。高校時代はインターハイに出場し、大学時代は箱根出場の夢は叶わなかったが、高いレベルで競技を続けてきた身には、あの走りは屈辱以外の何者でも無いだろうと想像できた。区間配置を決めたこちらが考え込んでしまったほどだった。

「さあ追いついた、ここからしっかり前を追うぞ」

「大沢ッ、今日はいいぞ、滑らかな動きだ、自分のリズムで行け、ソーソー」

70～80m前で中継した星野（甲州）の背後に迫ると、並ぶことなく前に出た。

「そうそう、ひとつずつ捨てて行こう、慌てることはない」

まだまだ余裕のあるフォームと表情でこちらを見てから、大沢は更にペースを上げた。しかし、大学生の星野も粘り強く背後に付くと、なかなか離れなかった。

「大沢ァ、ここはガマン比バだぞォ、負けるな負けるな、あれだけ練習してきたんだ、しっかり押していこう」

2人の競り合いが続いている後方で、大月の濱崎がジリジリと近づいてきていた。東農大のキャプテンとして、去年の箱根を走った濱崎は大沢の同級生だった。負ける訳にはいかなかった。7.2キロという短いこの区間だが、レースの流れをつかむ為に各チームとも主力を投入していた。

「後ろから濱崎が来るぞ、一緒に前を追え、いいか絶対に引くなよ」

「お前の走りは悪くないから大丈夫だ、そのままのペースでいけば、絶対に前は近づいて来るぞ」

後ろを振り返ることなく気配で察した大沢は、濱崎が背後に付いた途端にペースを上げた。

「よしッ、ナイス切り替えだ、いいぞ、そのまま押して行けッ」

リズム良く走る大沢のペースにキツそうな顔をしたのは、追いつかれてからここまで一緒に走ってきた星野の方だった。濱崎は位置をずらし、大沢の左後方にピタリと張り付いた。遅れ掛けた星野も必死に粘り、大沢を先頭にピラミッド状になって、前を走る内藤（笛吹A）との距離を詰めていった。

11月23日 県長距離記録会 & 3区試走～

「どうだ、去年のイメージを早く払^{ふっしょく}拭しないとダメだよなァ」

「そうっすね、でも今回はかなり短く感じましたよ、去年はラスト1キロ長かったですよ」

大沢は到着した万力公園で汗を拭いながら、去年の残り1キロの激しい闘いを思い出すように、そう言って笑った。学院大Gでの記録会で5000mを走り、そのまま2人でコース沿いに出て、3区の試走に来た。記録集計が少し手間取って、おいらが少し遅れて車で追いかけて、何度か声を掛けてから中継所で待った。

今日の記録会では風の影響もあり、先週の練習会のタイムトライアルより遅い、15分20秒台のタイムとなってしまったが、力は去年とは比べものにならないくらい上がっていた。仕事で練習会に参加出来ない時や、1人でポイント練習をした時は、必ず状況をメールで知らせてくれた。

チャンピオンスポーツの中でしごきを削りあい、心身ともに消耗して帰ってきた時は、陸上からは離れようと思った筈だ。それを再び違う形でつなぎ止めてくれたのは、走る仲間であり、変わらぬ声援を送ってくれる両親や関係者だろう。一般社会人として、あるレベルを維持していくのは並大抵のことではないが、「走るのが好き」という強い気持ちがあれば、自然と仲間が出来たり協力者が現れたりするもんだ。

「ここでトップが見える位置に来たいなァ」

「頑張りますよ、優勝する為には、初日にいい勝負したいですもんね」

公園の木々の葉は黄色味を帯び、ちょっとした風で簡単にパラパラと落ちていた。冬は、もうすぐそこまで来ているようだと感じた日だった。

「よし、詰まった詰まった、いいぞ、そのまま3人で追い込んで行けッ」

「4キロ通過、去年より21秒速いぞ、ナイスランだ大沢ァ」

まだ表情もいっぱいではなく、もう少し追い上げは出来そうな感じだった。この区間は距離が短いので順位は一気に上げられないが、前との差は詰められそうだった。次の小田切で上位に行くためには、何としてもここで大沢に、もう少し踏ん張って欲しいと思っていた。

「ソーソー、いいぞ、そのペースそのペース、イチニィソーソーイチニィソーソー」

「今日はよく動いてるぞ、強気で行こう、しっかり前を追うぞ、小田切が待ってるぞオオオオッ！」

上りが少しきつくなり、3人の走りに変化が出たのは5キロ過ぎだった。苦しい表情ながらもここまで粘っていた星野が、ジリジリと遅れだした。星野の健闘もここまでだった。前方には笛吹Aの内藤が車の陰から見え隠れしていて、3人で競り合ってから急激に大きく見えてきた。

「大沢ッ、絶対負けるなァァッ！」



同級生対決は意地の張り合いで最終局面に入っていった！

「いいぞオ、その調子だァ、最後まで頑張れええッ！」

動画を撮っていた末木さんとハンドルを握っていた拓パパが、この激しい展開に我慢できず、車の横を通り過ぎる大沢に大声でゲキを飛ばした。

「残り1キロ切ったぞ、さあしっかり勝負しろ」

中継所までもつれ込むと思われた2人のマッチレースは、初めて前に出た濱崎が大沢の顔色をうかがってからペースを上げた。ジワリといった感じのゆるいペースアップだったが、これが意外にも大沢に効いてしまった。ほんの半歩ほど遅れ掛けると、中継所が近づく距離に比例してジワジワと2人の間が開き始めた。

「ここが大事だろッ、ここで我慢するんだ、去年の借りを絶対返すぞッ」

おいらの言葉に目を見開いて、腕を強く振って何とか負けまいとその差を詰め、横に並ばずに再び前に出た。

「そうだ、その気持ちだ、引くな引くな、あんだけ練習したんだ、絶対負けない、お前が負ける訳がないッ、ソーソーいいぞオオオッ！」

「あそこ曲がれば中継所だ、小田切がいるぞッ、頑張れ大沢ッ！」

おいらと直樹さんの声に、ここまで来て負けてたまるか、という心が見え隠れして、万力公園の中継所の人垣の中に、2人は肩をぶつけ合いながらもつれるように飛び込んで行った。熱いものが身体中を駆けめぐった。この競り合いで、内藤（笛吹A）とは僅か4秒差となっていた。

「大沢ッ、ありがとう、よくやった、しっかりと去年のリベンジしたぞォ」

「ナイスランだ、ご苦労さ〜ん」

人混みの中に消えた大沢の背中に向かって、おいらと直樹さんは心の中の思いを吐き出した。自らの去年のタイムを31秒も詰めて、甲斐市新記録の走りだった。これで確実にレースの流れに乗っていきける、という思いを抱いた大沢の走りだった。

一度も姿を見ることはなかった首位争いは、下山（甲府）が区間新記録の走りで4位からトップに躍り出て、ラストでかわされた早川（南^{しんご}A）が4秒差で追い、内藤（南A^B）が続いて中

継した。トップの下山から6位の坂本（北杜）まで、わずから51秒という大混戦だった。Bの一般区間初登場の橋本は、佐野（西八・南巨）を抜いて順位を12位に押し上げた。



一般区間初登場の橋本は後半も粘り順位を上げていった

「慌てるな慌てるな、お前の走りをすれば届く距離だ、イーブンで記録を出そう」

おいらは大沢から熱いタスキをもらって飛び出した、**4区**の小田切に声を掛けた。こちらをチラリと見てから、並んでタスキを受けた小俣（大月）はあっという間に突き放

した。すぐに前を走る市川（笛吹A）に並びかけた小田切は、おいらが言った「お前でトップに立てなければ厳しいかもな」という言葉を噛みしめているように、後ろに付いて粘っている市川には目もくれず、更にもう一段ギアを入れ替えた。ここまでのレースの流れを読み、思い切り突っ込んで入っていた。それでもつぶれない力を小田切は持っていた。

選手にはそれぞれ役割がある。甲斐にとって小田切には、相手の力が劣っていれば自分のタイムを落としてでも、極端なスピード差で揺さぶってつぶして欲しかった。しかし、残念なことに、その相手は遙か前方を走っていた。

「よしッ、もう少し行ったら後ろに付くから、それまできっちり追い込んでおけ」

「小田切、前がどんどん近づいてるぞ、大丈夫だ、このペースで行けッ」

前方から落ちてきた阿部（山梨）を苦もなく抜くと、その前にいるベテランの向山（韮崎）に襲いかかった。

「さあ、こっからしっかり付くぞ、ここでトップに立てば明日の一面はお前で決まりだ、甲府まで絶対行くぞ、いいなッ！」

監察区域になって、後ろに付いた監督車から掛けたおいらの言葉に、首を振って頷いた小田切は、グングン向山との差を詰めた。さっきまで粘っていた社会人の市川も、このペースには付いて来れず、あっという間にその姿が小さくなっていった。勝負所でペースを上げる切り替え能力は、他を圧していた。

「よし、捕まえたら一気にいくぞ、お前の仕事はまだまだ先だ」

「小田切、あそこにトップが見えてきたぞ、行ける行ける」



パチンコ大丸を曲がり、5.3キロ地点まで来ると、かすかだが前方に白バイの点滅が見え隠れしていた。毎年のことだが、今回は特に、他の選手には小田切抜きのチーム編成の話をしてきた。練習会、遠走会、合宿とイベントのたびに「小田切は箱根に向けて必死に頑張ってるから、こっちは社会人の意地を見せよう」と話していた。

思い切り突っ込んでハイペースで前を追う小田切は区間新狙いだった！ 本人とはメールや電話で頻^{ひんぱん}に連絡を取り、とにかく何としてもメンバー入り出来るように応援していた。秋になってもAグループに残り、可能性を残したままいくつかの選考レースを迎えていた。日体大記録会、上尾ハーフと、あと少しで結果が出せず、最後の学連記録会の結果を連絡してきた時は、返す言葉に詰まってしまった。それだけの思いを抱えてやって来た選手が夢破れた時に、「帰って来い」とはとても言えなかった。

普通に走ればいつでも10000mは29分台で走れる選手が、結果を残せないばかりにメンバーに入れない。厳しいチャンピオンスポーツの一端を垣間見た瞬間だった。特に東洋の場合は、余りにも層が厚く、そこそこのタイムでは残れないという厳しさが存在していた。

本人が県一周を走ることを決めてから「あの事件」が起きた。振り出しに戻り、出場は白紙になった。こちらからは何もいうことが出来ず、ただ、待ちの姿勢だった。それでも、小田切は『甲斐市陸協のホームページ』の掲示板を見ては、みんなの熱い気持ちをくみ取り、気持ちを切らさなかった。

「見えた見えた、あそこにいるぞ、小田切ィイッ、このラップならまだ区間記録いけるぞ」

抜かれてからも粘っていた大学生の小清水（北杜）を突き放して、4位に上がってから、前との差が大きくしばらくペースが上がらなかった小田切だったが、しっかりと自分の目で獲物を確認すると再びギアを入れ替えた。上位グループに上がり、首位を狙う位置まで来たのはシナリオ通りだった。

「そうだそうだ、まだまだ行けるぞ、明日の一面待ってるぞ、絶対諦めるなァ」

「小田切、ここまで総合タイムで、去年の甲斐^{うち}を1分以上も上回ってるぞ、ナイスランだ」

おいらと直樹さんは何とか小田切に力を与えようと、考え得る限りの言葉を掛けた。3位の小沢（南アB）の姿は確認できるが、少し前に残り距離が2キロを切っていた。あとは区間新記録だけが小田切のモチベーションとなっていた。

「いけるいける、まだ可能性があるぞ、ここはしっかり名前を残しておけ」

「もう残り1キロになるぞ、小田切、こっから勝負だ、和希が待ってるぞォ」

ここまできたら記録を作って欲しい、の思いで、2人は小田切の背中に声を掛け続けた。車が出た時、初めて見せた小田切の苦悶の表情が、おいらたちを更に熱くさせた。中継所では1分以上もあった南アBを10秒差まで追い込んで、和希のいる東雲小学校前の中継所に、身体ごとぶつかるように小田切は走り込んだ。

「ご苦労さん、よくやった、ナイスランだ」

「小田切ィ、カッコ良かったぞォ、いいもん見せてもらったぞォ」

顔をしかめながら、こちらを見た小田切にみんなで声を掛けた。

「ああ、ちくしょう、ちょっとだけ足りねえ」

止めたストップウォッチを見て、おいらが思わず叫んだ。先輩の井上の区間記録に4秒届いていなかったのだ。正式ではないが、それほどの違いはないはずだった。

「いい走りしたけどねえ」

直樹さんが、まるでおいらを慰めるようにそう言ってこっちを見た。秒差の争いになった先頭は、進藤（甲府）と原（南アA）の学院附の先輩後輩が、日頃の練習と同じように抜きつ抜かれつのバトルを繰り返し、最後は意地で2年生の進藤が1秒だけ先着した。単独走になれば付け入る隙すきがあると思っていたが、こういう展開だと高校生でも力を発揮してしまう。それが悔しかった。Bの岡田は初の県一周駅伝を淡々と走り、抜いて抜かれて順位は同じ12位のままのタスキリレーだった。これがいい経験となって、大学で力を付けて帰ってきて欲しい。

「和希ィ、お前に任せた、ちょっと予定より遅れたけど、絶対一番前まで行くぞ、いいなッ！」

去年はおいらの言葉に手を上げて応えた**5区**の和希だったが、今年は頷いただけで、慎重にタスキを掛けてから前を凝視して走り始めた。この区間は4年連続で、走り方は身体にインプットされていた。毎年進化している和希は、常にこちらの予想を上回る走りをしてくれた。

「1キロ通過、石原去年より少し遅いです」

後部座席で、記録を取っている長坂さんが声を張り上げた。

「絶対1位で岩瀬先生にタスキをつなげます」と、今朝6時前にメールしてきた和希は、国道に出るまでの平坦な1キロは去年よりも遅めに入っていった。後ろ姿に自信が見え、おいらには返って頼もしく感じられた。それでも10秒差の足達（南アB）はすぐに抜いて3位に上がり、左折して国道20号の上りが始まってからは、ハッキリとそのピッチを上げ、南アAを猛追した。中継所での51秒差が、上り坂のせいもあって、すぐ目の前に感じられる距離になっていた。甲府の加藤は1キロも行かないうちに、高校生の有泉（南アA）を突き放し、みるみるリードを広げて独走状態に入って行った。

「和希ッ、もうすぐだ、このままのリズムでいいぞ、相手は高校生だ、近づいたら一気に行くぞ」



前との距離が100mを切ったからは、あっという間に有泉（南アA）の背中が大きくなってきた。力のある高校生だが、さすがにこのタフなコースでは、なかなか自分の走りをするのは難しそうだった。もう少し抵抗するかと思ったが、背後に付くことなく和希がペースを上げると、呆気なく差が開き始めた。

南アAのジープの上で、内藤監督始め、忠彦や斉藤たちが、何とか付いて行こうとする有泉にゲキを飛ばすが、2人の力の差は歴然だった。

「ソーソー、イチニイイチニイイチニイ、ナイスだ和希、ファイトだ和希」

「よっしッ、トップも見えてきたぞ、あとは甲府だけだ、行けるぞ和希ィ」

ここまで総合タイムで2分ほど上回っている^{うち}甲斐のペースで、トップに立てないのは、いかに今年のレース全体の流れが速いかという^{あかし}証だった。

「甲斐市ィィィ、いいぞオオオオ、トップはあそこだ、頑張れええッ」

国道沿いに甲斐市の関係者が大勢いて、首位の甲府を追いつめる和希の走りに大声援を送っていた。おいらたちは車の上から手を振りながら、熱くなる気持ちを抑えることが出来なかった。

「ここはしっかり我慢する、そうだ、勝負はここからの1.2キロだ、去年と同じだ、ここから追い込むぞ、絶対捕まえるぞ」

「相手はバテてるぞ、もうこっちのもんだ、自信持っていけッ」

加藤（甲府）の足取りは、立合橋の辺りから衰えていたので、時間の問題だと高をくくっていったこちらの思惑とは違って、なかなか背後に付けなかった。

「思ったより頑張るねえ」

「山岳をやってるし、上りだけは自信持ってるみたいだから、粘れるんだらうね」

直樹さんの驚きにおいらが答えた。確かに10m差まで来てからなぜか近づけなかった。

「ここだッ、一気に行けッ、付かせちゃダメだ、ラストラスト」

「相手はいっぱいいっぱいだ、行けるぞ、頑張れ和希ィ」

まるで壁のような最後のコーナーで和希が力を振り絞り、ついに念願のトップに躍り出た。ここまで耐えに耐えた加藤が、崩れ落ちるように離れていった。

「いまだッ、岩瀬先生があそこにいるぞ、最後まで走り切れッ！」

「ラストラスト、ソーイチニイチニィ、いいぞ和希、30分切れるぞオオオ」

意地でもトップに立つと決めていた和希は、中継所手前の勾配のキツイ残り200mでスプリントを効かせ、加藤に9秒もの差をつけて、5人分の汗のしみ込んだタスキを岩瀬先生に託した。甲斐市で参加して4年目、総合順位でトップに立った記念すべき初めての瞬間だった。おいらの内部で胃も腸も血も肉も、熱くなるような気がした。上りには絶対の自信を持っていた加藤を凌駕する、和希の大快走だった。

「ご苦労さん、和希ィ、よく頑張った、29分台だ、凄いッ、凄い走りだったぞ」

「ナイスラン、いいもん見せてもらったぞォ」

「お疲れえ、いい走りだったぞォ」

「ゆっくり休んでから来いよォ、明日も頼むぞ」

興奮した車内は我慢できずに、みんなで走り終わったばかりの和希の背中に賛辞の嵐を浴びせた。Bの松永は厳しいコースをよく頑張り、長谷川（山梨）を抜いて11位に順位を上げてきた。目標のヒトケタが見えてきた。

「先生ッ、前半は楽に行こう、ペースは任せます」

10年連続で笹子の峠越えを受け持つ**6区**の岩瀬Drも、本人の中では集大成だと思っているのかも知れないと感じていた。北巨摩の時代からずっと一緒にやって来て、何度も優勝の2文字が見え隠れしては、大きな力に跳ね返されてきた。4年連続区間賞を含め、常に上位で走る安定

感は、指揮する立場としてはこれほど安心できるものはなかった。

甲斐になって初めての年に、正直言ってとても上位は厳しいチーム構成の中で、『笹子の岩瀬』がいたおかげで、チーム成績よりも何とかそこで上位に上がろうと考えた。その配置がうまくいき、7位で受けたタスキを区間賞の快走を見せ、上りの6キロだけであっという間に6人抜きを演じて2位まで上がり、おいら以外のスタッフを驚かせた。そこでいい流れが出来て、思わぬ総合4位という結果を得たのだ。それが甲斐市の^{いしずえ}礎を築いた年だった。

北巨摩から続いているメンバーの小池や菊池と、「今年こそ」と話しては、ここまで高いモチベーションを保ってきた。

「いいよ、ペースはこのままでいいよ、温まるまでは無理しないで行こう」

「ファイトです、菊島が来たら一緒に行こう」

9秒差でタスキを受けた菊島（甲府）が、ジリジリと迫ってきた。中央大卒で、今は自衛隊にいる菊島のカだけは計りかねていた。あまり状況が見えてこなかったのだ。しかし、このコースでは岩瀬Drとそれほど差があるとは思えず、一緒に行けるなら走りやすいだろうと考えた。

しかし、どちらかと言えば、追いかけた時に持ち味を発揮するタイプの岩瀬Drには、苦しい展開なのかも知れなかったが…。

「ソーソー、いいねえ、リズムいいよ、リラックスできてるよォ」

「最短距離とって行こう、そうそう」

若い菊島が大学生の頃より柔らかくなったフォームで、スルスルと背後に近づいてきた。その気配を察した岩瀬Drは、心持ちリズムを速めた。コーナーで並びかけたが、菊島は抜き切ることが出来ないでいた。

「引かない引かない、このまま行くよォ、上りはあと4キロ」

「岩瀬先生ッ、よく動いてるよォ、大丈夫です、ペースは悪くないよォ」

右コーナーで左から抜きにかかった菊島を、前に出すことなく指し切り、常に半歩前を走り続ける先生は、「負けてたまるか」の気迫の固まりだった。全く人氣がなく、葉を落とした山の景色は、まるで海底の^{さんご}珊瑚のように両側に湿った枝を広げていた。

「4キロ通過ア、上りはあと2キロ、さあ元気出して行こう、負けないうよォ」

「ここしっかり付こう、この差で行けば大丈夫だよォ」

菊島が何度か仕掛けては後ろを振り返り、粘り強く付いてくる先生の表情を確認して、また併走になるという展開が続いていたが、4キロの手前で菊島が強い切り替えをすると、2人の差が



静かな山間に、2人の闘志は肉体だけでなく心理戦でも火花を散らしていた

も、おいらの言葉にしっかりと頷いて、「はいッ、分かりましたッ」と大きな返事を返してきた。何もこんなキツイ場面で返事なんかしなくても、と思ったが、それが『岩瀬史明』という男だった。

「よしッ、ソーソーいいぞォ、しっかり並んで行こう、気持ちで引いたらダメだよ」

気力を振り絞って、一番勾配のキツイ右カーブで再び菊島に並び掛け半歩前に出る。ここまで来たら何としてもトップで、という思いが伝わってくる走りだった。レースには何回か我慢するタイミングがある。そこで一気に引き離されずに我慢できれば、再び逆転のチャンスがやってくるのだ。岩瀬Drは、駅伝をよく知っていた。

「さあ、上りきったよ、勝負はこっからだ、しっかり切り替えて行こう」

頂上の新しくなったトンネルの中に飛び込んでいく岩瀬Drの背中に、みんなでゲキを飛ばした。頂上の手前で再びスパートした菊島とは、まだ10~15mくらいの差だった。出口に向かう前方の菊島の黒いシルエットが、大きく揺れて踊っていた。

「まだまだ、こっから行くよォ、力抜いて滑らかに下ろう」

「残り6キロ切ったよ、あとは思い切って行こう」

おいらと直樹さんは、顔を歪めて必死に走る岩瀬Drの背中にゲキを飛ばしながら、枯れ葉舞う冬の風を頬に受けていた。

「思ったより走れるね」

「うん、あのフォームじゃ下りは無理だと思ったのに、そこそこ行ってるね、でも先生のペース

6~7mに開いた。何度も振り返っては差を確認する菊島にも、絶対的な自信はないようだった。おいらは運転するパパに頼んで、走るDrの真横に付けてもらい、相手に聞こえないように小声でつぶやいた。

「大丈夫、これ以上離されなければ下りで絶対行けるから、とにかく粘ろう、あと上りは1キロちょっとだよ」

菊島の背中ををにらみながら



笹子峠の厳しさを相山の掛け声で乗り切った杉田の勇姿！

が去年よりは遅いからだと思うよ、菊島が強い訳じゃないね」

下りになってもペースが衰えない菊島を見て、そう言った直樹さんの言葉に、おいらが答えてから、前方の2人の走りを改めて眺めた。少し風が出てきて、車の屋根から上半身を出している身体に、舞い散る枯れ葉が降り注いだ。

「諦めないで行こう、柳が待ってるよオオッ！」

切り替えてペースを上げたはずなのに、徐々に菊島との距離が開いていくもどかしさに、いらついているであろう岩瀬Drの背中に大声で叫んだ。

「11キロ通過ア、残り1.6キロ、最後まで使い切ろう、ソーソーいいよ」

「まだ甲府はあそこにいるよオ、岩瀬先生頑張ろう」

コーナーを曲がるたびに見える菊島の姿を追って、エネルギーの一滴まで使い切ろうとしている男がそこにいた。一緒にチームでやって来た十数年のいろんな場面が、走馬燈そうまどうのように一瞬にして脳裏を駆けめぐった。

薄暗い杉林を抜けると、不意に視界が開けた。

「まだ終わってないよオ、諦めたら終わりだ、タスキを渡すまで絶対引かないよオ」

「残り1キロ切ったよ、さあ少しでも詰めて柳に気持ちを届けよう」

残り少ないエネルギーを総動員して、何とか前に近づこうと必死に腕を振る。鬱蒼うっそうとした杉林の峠道を抜けると、あちこちの関係者が応援に来ていた。甲斐市の応援隊も中継所から歩いて来たらしく一気に増えていた。

「岩瀬先生ー、頑張ってええええッ！」

「ラストラスト、まだ差はいくらもないよオ」

「いいぞ、甲斐市2番だ2番、前は疲れてるぞオ」

おらが地元の応援に遠くまで駆けつけてくれた観衆は、ノドが張り裂けんばかりに声援を送ってくれた。初出場から、4、3、2位ときて、誰もが優勝を意識していた。もちろん選手も関係者もその気でいたが、そんな簡単なものではないことも知っていたのは事実だった。

中継所手前の最後の右コーナーを、ガードレールにぶつかりそうな勢いで曲がり、すでに選手の走り去った中継点に頭から飛び込んだ。勢い余ってそのまま人垣の中に倒れ込んだ岩瀬Drに

声を掛けた。

「ご苦労さん、よく粘った、ありがとう、先生ッ」

「ゆっくり休んでゴールに来てよォ」

「おーい、先生頼むぞォ、よくみてやってくれ」

付添いの石水やはなにも声を掛け、国道20号線に右折してレースに戻った。後続は、秋になってこのレースに合わせてきた岩澤（笛吹A）が、2年連続の区間賞の走りで、総合3位までチームを引き上げていた。これで戦前の予想通り、4強がしっかり上位にそろっての後半勝負とな



菊島に逃げ切れ、悔しい一斉スタートとなった7区はこの日の最長距離区間だ！

んじゃねえの、これじゃゴールは難しいね」

この**7区**はいつも、5~6キロ地点を過ぎてやっと後尾車に追いつくという展開なのに、トップとの差がほとんどなかったの、数百mですぐに追いついてしまったのだ。

「あれッ、こりゃ^{とも}智史だよ、おかしいな、どっか痛えんじゃねーのかなァ」

箱根の学連選抜の出場を決めている坂本（北杜）が、最後尾でジョギングをしていた。どこか故障気味なのか、それとも最後まで無理せずこのペースで行くのか、計りかねる展開だった。車が追い越し、サングラスを掛けた表情を覗くと、おいらの顔を確認して坂本はニヤッと笑った。

「故障じゃないみたいだね、無理しないようにしてるみたいだよ」

隣の直樹さんにつぶやきながら、目は前方を追っていた。相変わらず車の量が多く、なかなか流れから抜け出せなかった。まだ先頭集団は確認できる位置にいて、先導の白パイの点滅が渋滞

ってきた。

一斉スタートとなったBの杉田は、社会人初登場の意地で、総合成績では2人に抜かれはしたが、監督車からの同級生の相山のゲキに応えてこの難コースを克服した。

「おッ、もう遅れてるヤツがいるよ」

「ほんとだ、足でも痛めた

の車の陰から確認できた。戦前の予想通りスピードランナーが集結したが、逆に牽制しあって自重気味の展開になっていた。

今回の一番の楽しみと心配が入り交じった区間だった。2月に移籍してきた柳は、1500mを走れるスピードがあり、甲斐には少ない下りに強いランナーだった。しかし、11月の後半から腰に痛みが出て、練習会に来てジョックのみで上がる日々だった。「無理かな…」と思い始めた最後のポイントで、1000mを2分55秒で上がってきて痛みもないということだったので、どうにかこうして初日を迎えることが出来た。それでも今朝までは、何か言ってくるかもしれないと思い、毎日携帯電話を握りしめたまま眠っていた。ま、それは毎年のことだけど…。

「柳ィーッ、いいぞォ、前半は無理するな、リラックスしていけッ」

距離が進んで選手がばらけ始め、やっとはっきり見えた先頭集団の中に柳の姿を見つけ、届くかどうかは分からない距離だったが、叫ばずにはいられない心境だった。レースはまだ序盤だ。今のうちは力を貯めて、後半の切り替えに備えて欲しかった。

「大丈夫そうじゃん、落ち着いてるし、あの流れなら結構一緒に行けるらに」

直樹さんもホッとしたように笑顔でつぶやいた。

「大地ッ、力を抜け、まだまだ楽に行け、勝負は後半だぞ」

Bチームの石水が、先頭集団からこぼれた数名のランナーの中にいた。Aチームの監督車のメンバーにとっては、1区の鶴沢以来のBの選手の姿だった。高校1年生には厳しい最長距離区間だが、自ら手を挙げたという意気を買っての増田監督の起用だった。

11月30日 全コース下見～

早朝からの手塚の試走を終えて、Bの高校生のコース下見に付き合った。敷島で待ち合わせし、岡田、高橋、松永、大地の敷島勢に増田監督、相山コーチのメンバー。そこから京都行きを決めた農林高へ行って、鈴木先生と少し話した後、練習が終わったばかりの橋本を乗せてコースに向かった。

3区の橋本、4区の岡田、5区の松永、7区の大地、8区の高橋、9区の増田監督、そして2日目に入って、12区の岡田、13区の高橋、17区の橋本と、笹子の旧道へ入らなただけでほぼ1周し、農林高に戻ったらすっかり暗くなっていた。初めて全コースを見たであろう高校生たちは、その規模の大きさに驚いていた。走り方の確認やコースのチェックポイント、これまでの各区分でのエピソードなどを話していたので、それほど長いとは思わなかった。

「この辺は応援の人が多から、しっかり走れよ、カッコイイとこ見せないとな」

「大勢見てたらペース落とせねえよな」

「そうですねえ」

相山コーチ始め、橋本以外は全員が敷中の先輩後輩だった。これにまだ、大沢や小田切、和希、はな、スタッフ一同入れると、まるで中学の同窓会みたいだった（笑）

学校では長距離の仲間がいない高橋や大地に、1人でやる練習の注意事項や年間の練習計画、相山コーチの全国大会の話など、とても有意義で楽しい時間だったと感じた。オジサンたちには分からない会話も飛び出して、『若者語録』の勉強にもなった半日だった。

「とにかくみんなでワイワイ楽しくタスキをつなごう、悔いのない走りをすればそれでいい」

「はい」

「ハイ、頑張ります」

「は〜い」

数年後には甲斐市チームを背負っているだろう若者たちとの、貴重な^{とき}時間だった。

「後半はしっかり粘るぞ、大地、諦めずに走れ、早く自分のリズムを作れ」

直樹さんも追い越しざまに、表情を確認してから声を掛けた。来年の為にはいい経験になるだろうと話しながら、前方に顔を向けた。

「おっ、3人くらい出たみたいだね、依田かなア」

「黒っぽいユニフォームもいるねえ」



積極的に先頭を追いかける柳の強気な走りはいつもと変わらなかったが！

先頭集団から予想通り、依田（甲府）、宇津木（大月）の箱根メンバーと、力のある加々美（富士吉田）を含めた大学生が抜け出して、トップ争いを繰り広げていた。本格的な揺さぶり合戦が始まった。本来ならこのメンバーの先頭にいる筈の坂本は、まだだいぶ後方にいた。柳は体調が万全であれば、依田にそれほど負けるとは思っていなかったが、練習不足の今日は、

とにかく慎重な走りで最後まで持たせて欲しいと言ってあった。

「坂本のペースがジョギングじゃなくなって来たよ、ホリウッさん」

直樹さんの言葉に振り向くと、スピード感はそれほど感じないが、こぼれた選手を次々に拾って順位を見る間に上げてきた。その走りは自信に満ちて、最終学年でやっと手に入れた箱根出場が、間違いないことを^{うかが}窺わせた。

「4年目にしてやっと、夢の舞台に立てそうです」と、10月の予選会後にメールしてきた言葉が忘れられない。チームとしては叶わなかったが、個人でも、走れる喜びをしっかりと味わって欲しいと思った。

「柳ィーッ、リラックスリラックス、まだここは無理に追うな追うな」

「先頭も見えてるから、じっくり行けば大丈夫だ」

5キロを過ぎて、3人の先頭集団を追う2番手グループが二つに割れ、柳が市口（南A）らとともに後ろに下がった。おいらの脳裏に腰の痛みが出たのかと不安がよぎり、近づいてくる柳の苦しげな表情を見て思わず、「大丈夫か？ 痛かったら無理するな」と言って、走り去る背中を見送った。“もしや”と“まさか”が、頭の中でせめぎ合っていた。

中央本線のガード下をくぐり、6キロ過ぎの船石橋のコーナーで、再び近づいてきた柳の状態を凝視した。走りそのものはどこかをかばってるというものではなく、フォームもいつもの多少肩をいからせた姿だった。ただ、顔を^{ゆが}歪めて走る顔を見ていられなくて、まだまだ前半だし、腰を押さえるようなゼスチャーでも見せたら止めようとしていた。

「よーし、もう少しで10キロだ、最後までしっかり走ろう」

「粘るぞ、諦めちゃダメだ、ソーソー、そのペースでいいから押していけ」

「柳ッ、菊池が待ってるぞ、ファイトファイト」

「頑張れえええッ、前もキツイぞ、まだ行ける行ける」

一歩でも前にといい気持ちを出して、苦しみと闘い続ける柳の姿に、全員で声を掛けた。車を止めて、沿道を走りながら声援を送っている関係者もいた。

先頭集団は、ジョギングから入った坂本がビルドアップ的に、中間点辺りでギアをトップに入れ替えた。あっと言う間に先頭争いに加わり、そのペースについて行けない加々美が落ち、再び3人で形成されていた。柳の後方で市口がジワジワと上がってきた。市口はさすがにベテランで、前半の速いペースには乗らず、マイペースで後半戦に備えていた感じだった。

「柳ィ、残り3キロ切ったぞ、ここからでタイムが変わるぞ」

再び下りになった真木の信号を左に曲がり、渋滞した車の左側を歯を食いしばって抜いていっ

た。今度は後ろ姿を見ながらの走行だった。例年だとこの辺で車の中は落ち着いてくるのだが、今年は一時も目を離せない展開が続いていた。

「市口が追いついたようだね」

直樹さんの言葉に、前との差を計っていたおいらが振り向くと、2人がもつれるようにこちらに近づいてきた。大月ICの、ここから残りは1キロ足らずだった。

「あと1キロ、ここまで来たらしっかり使い切ろう、残すな残すな」

「最後のり坂をしっかりと走るぞ、ラストラスト」

スタッフの顔を見て走り去る柳の目は、まだまだ力を宿していた。気持ちはあるが、直前の故障で練習量が足りていなかった。それがスタミナ切れを起こしたのだらうと思われた。急速に消費される酸素を体内に循環させるべく、心臓が限界を超えて収縮を繰り返し、息が上がる。

「柳ィーッ、最後は絶対負けるなァァァッ！」

監督車の入れない中継所に向かって、ラストスパートに入った背中に、国道の上から力の限り叫んだ。一度は前に出られた市口を振り切って、笑顔で待ってる菊池に7位でタスキを託して倒れ込んだ。

一番悔しいのは本人だろうが、この状態の中で持ってるモノを出し切る走り、しかもキチンと甲斐市新記録で走り、優勝への希望をつないでくれた。先週の壮行会の後で、飯野Drに痛み



止めの処置をしてもらったりと、チーム上げての努力だった。本人の性格が素直なので、すぐにチームに溶け込み、選手だけでなく関係者も暖かく受け入れてくれたことに、とても感謝していた。夏の納涼会、クリスタルラインの遠走会、富士見合宿と、イベントは全て楽しそうに参加して、仲間と心地よいコミュニケーションを取っていた。駅伝はチーム力だということを、

大学時代に学んだと言って、出来る努力は最後までしますとメールをくれた。

先頭争いは、ラストのキレで抜け出した坂本がトップで中継し、宇津木と依田がこれに続いて走りきった。毎年のように区間賞争いをしている中村（^{まさひと}笛吹A）が、今年は生彩なく5番手に落ちていた。北杜は5区の上りにつまずいてしまったが、坂本の起死回生の力走で、再び上位への光を見いだした。

Bの大地は経験したことのない最長距離を、強気の走り最後まで粘り、総合順位は13位で



高橋にタスキリレーした。

2年続けてこの**8区**に配置した菊池は、今年からインドへの長期出張が何度もあり、なかなか思うような練習は積めなかった。それでも出張先で甲斐市陸協のホームページを見て、練習会の様子やみんなの状態を確認して、気持ちを切らさないようにしていたようだ。夜中にイ

ンドから帰国して、そのまま1^{km}×4のインターバルをしたり、あっちでも毎日走ったりと、キチンと準備をしてくれていた。

「甲府は強そうだけど、今年の甲斐市は何か起こしそうな気がします」とメールをよこした。「甲斐に風が吹いている気がします」とも。

1週間前の長距離記録会で15分53秒で走り、努力が無駄ではなかったことを証明して見せた。本当に大会が来るのが待ち遠しいということも、何度も言っていた。

中村の思わぬ不調で苦戦を強いられた岡部（笛吹A）が、鋭い視線で前方をにらみ、凄いい勢いで走り去った。

「まだまだ、ここでお前がしっかり走れば、優大で上げられるからな、頼むぞっ！」



都留高校前を通り過ぎ、車の後方に現れた菊池に声を掛けた。おいらの言葉にしっかりと頷いて、自分の役目を確認したように、ここからしばらく続く坂道に走り込んで行った。1秒差で中継所を出た大学生の桜田（南アA）には抜かれたが、落ち着いてその背中を追いかけていた。

前の3チームとは差が大きかったので、中部（北杜）や山田（甲府）

去年の悔しさを胸に、上り坂を小気味いいピッチで走り込んできた菊池！

の姿は見かけることが出来なかった。最後と決め、力を付けて挑んだ去年のレースで、思ったよ

うな走りが出来なかった菊池は、今年を集大成ととらえていた。

「いいぞ、菊池、その前が見えてきたぞ、どんどん詰まってるぞ」

「落ち着いて、ひとつずつ抜いていこう、そのリズムでいいぞ」

中継で1分半もあった越石（富士吉田）との差を一気に詰めて、すでにその背中が大きく見える距離まで迫っていた。去年とは動きが違い、上り坂をリズムカルに駆け上がって行った。7区の付添いに付いてくれたはなからの報告で、6区までで笛吹Aに35秒、南アAには58秒の貯金があった。アンカーに小池もいることだし、相手はやはり甲府だろう。気持ちよく走られるのだけは、何としても避けたい。どうしても相手（甲府）にプレッシャーを掛けられる距離にしたかったのだ。

3月30日（日） 櫛形陸上競技場…

『菊池努ちよっとだけ送別記念』と銘打って声を掛け、総勢31名が集まった5000m記録会。

甲斐だけでなく、南ブス、甲府、北杜、笛吹、中央と集まり、にぎやかに行われた。別に菊池がいなくなる訳じゃないけど、長期の出張が増えるということで、会社の陸上部としてやろうとしたが、数名では淋しいとのことでおいらが呼びかけたのだ。

練習会のメンバーがかなり集まり、いつもと違う日曜日の午前中という明るい時間帯に、ワイワイ言いながら楽しそうにアップを始めた。

「2000m通過、5分59秒、ラップ72秒、いいぞ、このまま押していこう」

北からの風がかなり強く吹き、バックストレートは正面から受けて、走りにくそうに頭を下げて進むほどだった。3000mまで引っ張る予定だった斎藤が2000mでいなくなり、^{けんた}石井と柳が風に立ち向かったが、3000m手前で柳が下がって先頭が健太1人になると、ペースが維持できなくなった。後半は1人で走り、15分3秒でのゴールだった。柳、岩澤、上原、大沢までが15分台で入り、菊池は後半前を追って粘ったが、惜しくも16分9秒のタイムだった。それでも本人は、「結構走れました、ありがとうございます、大勢来てくれたからほんとに楽しかったです」と言っていた。

去年の11月から緑ヶ丘が改修工事で使用不能になり、梨大医学部G、農林高Gとこことを、半年近くジブシーのように渡り歩いていたが、この日を最後に再び緑ヶ丘競技場に戻った。

「よしよしよし、よく詰めた、もうひとついるぞ」

「ここで抜けば、また前が見えてくるぞ、頑張れ菊池」

「菊池ィ、ナイスファイト、いい位置まで行こう」

富士吉田の背後に迫った菊池に、みんなで力を送った。すぐ前には大月も見えていた。富士急のガードをくぐるとまもなく中間点だった。一旦止めた車を出すのに手間取っていると、Bの高橋がやって来た。練習会はもちろん、ドラゴンでいつも一緒に練習し、練習メニューも渡してる高橋は、初出場のプレッシャーを心配したが、見た感じではいつも通りの軽い走りだった。

「高橋ッ、その感じだ、もう少し行くと上りになるから、しっかり腕を振れ」

「リズムいいぞ、前も見えてるからしっかり追うぞ、集中集中」

ハチマキをして走る高橋を追い抜き、菊池を追いかけた。すでに大月を指呼の間に追いつめ、いい汗を額にうっすらとかいていた。

「菊池ッ、さあ、このまま行こう、どんどん行こう、もうこの坂上れば4キロないぞ、残さずにしっかり使い切ろう」

「いいペースで来てるぞ、ナイスラン、菊池、ここまでタイムもいいぞ」

表情は少し厳しくなったが、リズムもペースも良く、走りそのものは去年とは雲泥の差だった。一般の社会人は悪条件の中で何とか時間を作ったり、睡眠時間を削って朝練や本練習をこなしている。「走るのが好き」ということと、仲間の存在だけが支えになっているのだ。練習量の違う大学生との本来の力の差は埋めようがないが、精神的にはずっと上回っている筈だった。

「よしッ、よく抜いた、南ブスもまだあそこに見えてるぞ、絶対目を離すなよ」

中継所では3分以上も開いていた大月の戸塚を抜いて、6位に上がった菊池は、キツイけどペースが落ちないというランニングハイ状態にいるようだ。目の力もあり、ここはもう少し追い込んで優大に渡して欲しいと思った。先頭の状態が分からないので、甲府の山田がどんな走りをしているのか見当も付かなかった。明日の為に、少しでも差は小さくしておきたかったのがスタッフの本音だった。

「菊池さ〜ん、ファイトで〜す、前もバテてますよォ」

「まだ行けます行けます、最後まで頑張りましょう」

「あと1キロちょっとです、ラスト上げましょう」

走り終わった選手や関係者が、先回りして沿道で菊池に大声援を送っていた。全く陸協に関わっていない人たちまでが何人もいて、甲斐市の熱さに胸がズキンとした。

「ここだ、ここまで来いッ、菊池ッ、もうすぐ中継所だ」

「もう1キロ切ったぞ、いい記録出せるぞ」

都留の駅前の信号で止まった車の上で、近づいてくる菊池においらと直樹さんはゲキを飛ばし

続けた。明日のことは考えるなどと言っているので、何としてもエネルギーを使い切ってタスキを渡そうと、懸命にもがいていた。Bの高橋の順位は13位のまま変わらず、目標のヒトケタまであとは残り2区間の壮年隊に託すことになった。

「優大ッ、来るぞッ、いいか勝負は後半だ、あとは任せたぞッ」

元々狭い道路に人が溢れ、中継所には道が見えなかった。待ちきれずに首をカクカクしている

9区の優大に向かっておいらが伝えた。今年はほんとにケガや病気に見舞われ、散々な年だった上に、11月に腰の違和感が出たために、しばらくドクターストップがかかって休養をしていた。練習にゴーサインが出てからはずっと練習内容をメールしてくれ、ポイント練習のタイムもキチンと報告してくれた。「自分は出られる努力を最後まで精一杯やります、使うかどうかはホリウッさんが見て決めて下さい」ということだった。今週の緑ヶ丘の試合前最後の練習会には、後輩の手塚とやって来て、マイペースで調整していた。

「よーし、前半は楽に行け、ラップは去年と同じだ、勝負は後半だぞ」

「串田ァ、ここで甲府（穴水）を詰めるぞ、普通に走れば絶対大丈夫だ」

入りは落ち着いて走っていた。去年ほどの練習量はないかもしれないが、地力については、走り方によっては区間2位で走った去年並みでいけるのではないかと考えていた。去年は一般区間が初めてとあって、少し緊張感が感じられたが、今年は調整に不安があっても落ち着いて走っていた。元々長い距離の適正はあるし、故障さえ治れば走れると思っていたが、間に合っ



監督自らレースに参戦し、激しい気迫を見せて選手たちを鼓舞した！

ほんとによかったという気持ちだった。

「増田君ファイト、しっかりタスキを繋ごう」

「若い高校生に見本を見せるよォ、強気で走ろう」

ちょうどBの増田監督が選手となって通過し、みんなで声を張り上げた。本来なら監督業に専念してもらいたかったが、いかんせん頭数が足りなかった。

まだ2チームにするには無理があったのかもしれないが、おいらが頭を下げて頼み込んだのだ。

(でも本人は走れて楽しかったらしい、やっぱランナーです)

勝つためには何が必要か？ 北巨摩の時もそうだったけど、チームの信頼や絆というのはとても大切だけど、下からの突き上げというのはもっともっと大事だと思えたのだ。いろんなカラーがあっというし、「次はAで走りたい」と思ってくれる選手が出てこない、本当の切磋琢磨は出来ないと感じていた。Bに落ちたくないという危機感と、どうしてもAで走りたいという意欲が交錯した時に、一番上が見えてくるんじゃないかと思っていた。

「よーし、よくあのペースで上りきったぞ、これなら大丈夫だ、自信持っていけ」

「前との差が詰まってるぞ、このまま行けば見えてくるぞ、頑張れ串田ッ」

車を飛ばして串田に追いつき、声を掛けて鼓舞こぶしていると、あちこちで甲斐市の関係者だけでなく、学院付の選手たちが沿道で串田の応援してくれていた。高校2年の若い選手にとっては苦しい1年間だったが、これが突き抜ける為の試練になればいいと思っていた。どんな練習に対しても意欲的だし、目標も高いところに置いている。

「優大ッ、ほぼ去年と同じだッ、あとは後半の走りだぞ、しっかり押して行こう」

「残り2キロちょっとだ、ここから勝負だ、頑張れ」



5キロの通過はほとんど去年と同じだが、走りそのものはやはり重かった。それに表情に余裕がなくなってきた。「何としても」という強い気持ちでここまで来たが、去年はキツくなったここから、ペースを落とさずにいけたのでタイムがグッと上がったのだった。

「あの中央道の下を抜けたら、残りは2キロだ、向かって行くぞッ」

「さあ、みんなの応援がいるぞ、いいとこ見せよう」

前との差が大きいので、全く1人で走る形になった串田は、練習不足という精神的な重荷も重なって徐々にペースが落ちた。相手がいればまた違っただろうが、この状況では致し方なか

いいぞ、ここまでは設定通りだ、優大ファイトオオッ！

った。流れに乗れないと展開がどうしても悪くなってしまうものだ。

「ラスト1キロッ、こっからは使い切るぞ、絶対に残すなァ」

大きく腕を使って、最後の急坂に挑んでいる串田にゲキを飛ばした。

「腕は抱えるな抱えるな、ソー、大きく使ってしっかり走ろう、いいぞ上がった上がった」

「小池が待ってるぞォ、串田ァ、勢いの付いたタスキを渡そう」

しばらく見ないうちにすいぶん景色が変わった中継所に、串田は右手に巻いたタスキを握りしめて突進していった。中学生の時から練習会に来ているので、走りを見れば調子が分かるようになったが、こういう強い気持ちを見せるようになったというのが嬉しかった。フォアザチームの精神は、甲斐の選手全員に伝わっていると思えた瞬間だった。

「ご苦労さん、よく頑張った、優大、ラストよかったぞ」

「ナイスガッツだ、ありがとう」

「小池え、あとは任せた、お前だけだ、悔いのないレースにしよう」

「明日の為に少しでも前を詰めるぞ、逆転出来る差にしようぜ」

10区の小池も今年は散々だった。夏前に脚を痛めて、なかなか思うように練習が出来なかったこともあり、調子が上がらない日々が続いた。そこそこ練習が出来ようになった秋になっても、ポイント練習は走れたり走れなかったりが続いた。最大の危機は、Bチームを作ると決まった後の今年のハヶ岳ロード10キロで、飯野Drに1分以上も負けてしまった時だった。甲斐市には40代50代の人材は豊富で、たとえ2チームあったとしても、代表で走れる保証は何もなかった。

「気持ちで引くなよ、いつものお前の走りでもいいぞ、自信持って行けよォ」

「ここで甲斐の走りを見せるぞ、いいゴールにしよう」

5000mでベストを出した去年ほどではないにせよ、返ってプレッシャーのない今年の方が走りやすいだろうと思えた。本人はハヶ岳の結果もあって不安だったようだが、おいらは全く心配していなかった。ここ数年の安定感と、キレさえ取り戻せばいつでも走れるだろう、という妙な自信がおいらの中にあった。A、Bの振り分けをする時も、飯野Drには大変申し訳ないが、アンカーは小池で行くと決めていた。コース状況が違ったら変わったかも知れないが、あの距離のあのコース設定では、小池に一日の長があるだろうと思えた。

「飯野先生、ファイト、この坂はキツイけど、勢い付けて行くよ、ソーソーいい感じ」

小池が中継してすぐに一斉スタートとなり、いきなり10数名が追いかけて来た。その一番前



優勝への一縷の望みを賭けて見えない敵（甲府）を追い続ける小池！

を、我らがジョニーが走っていた。車は渋滞にはまり、ちょうど小池と飯野Drの間に位置していた。どちらも見ながら声を掛けるといのは、意外に大変だった。

中間点では後方の飯野Drの姿が、かなり大きくなってきた。

「こりゃだいたい詰めてきたねえ、このペースじゃ小池まで行っちゃうんじゃないねえ」

直樹さんが前方と後方を交互に眺めて、そう言っていた。確かに、最初は100m以上あった差が、目測で60mくらいになっていたのだ。絶好調の飯野Drにとって、兄貴と慕う小池の背中がこんな形で近づいてくると、身体中から力が湧いてくるだろう。最高のシチュエーションでスタートした結果だった。

8月30～31日 富士見高原にて…

一番心配していた天候が崩れ、午前中はかなり強い雨が降っていた。仕事をしながら雨空を眺め、富士見はどうだろうと思いを馳せていた。初めてのメンバーもいるので、本当は暑くても天候がいい方がよかったのだが…。

スポーツセンター前に2時に集まり、練習場所のクロカンコースまで歩いていった。

「組み分けは、A、B、C、Dの4組、あ、その他も入れて5組、メンバーと設定ペースは忠彦から発表します、あと、だいが雨が降ったから足元が悪くなってるので気をつけて走るように、最後までしっかり使い切って、夜はうまい飯を食おう」

各地区から総勢46名の参加、そのうち半数が甲斐のメンバーだった。

「じゃあ、組み分けいきます、Aグループ、大沢、柳、下山…」

忠彦がメンバーと設定タイムを指示して、小雨の中で練習が開始された。小池は本調子ではないと言いつつも、増田、飯野、志村などの、中年ハッスルトリオを含むBグループで、元気に走り出した。（ある意味、このメンバーが昼も夜も一番パワフルだった気がする）

午前中からの強い雨で、コースに敷き詰めてあるウッドチップが流れだし、水たまりも何力所かあったので、おいらは競技場の倉庫からトンボを借りてきて、長坂さんと整備に入った。1

周1キロのコースを終えるのに手間取り、みんなの走りをキチンと見ることも出来なかった。

ラップは末木さんや功刀、忠彦たちに任せ、選手が走りに集中できるようにと、水たまりをひとつずつ消していった。

小池はマイペースで走り、意地の張り合いの中年トリオの争いには参加しなかった（笑）

初参加の山梨市や南ブスの高校生も、強い社会人に刺激されて厳しいコースに挑んでいた。柳と健太は下り坂でぬかるみに足を取られて転び、泥だらけになりながら走っていた。実際のクロカンレースも似たようなもので、こういう経験は大切ではないかと思った。

「あと10分、しっかり最後まで使い切れよオ、スタミナ残すなよオ、合宿だぞオ、動けなくなってもいいぞオ」

Aグループは、合宿初参加の下山が半分も行かないうちに飛び出して、健太が1人でそれを追いつき、後半ペースが上がらなくなった下山をかわしてトップでゴール。忠彦にラップを聞くと、先月ここで合宿していた佐久長聖のAとBのちょうど中間くらいのペースだった。ホームコースとはいえ、力をつけたことを実感できた。大沢や柳も続き、甲斐市のレベルが上がってきたことをしっかり確認した。

全員が目一杯走り込み、歩いて競技場まで行き、流し替わりの200x3リレーをやった。3人一組で10チームほど作って始めたら、これが思いのほかキツイ。みんなクロカンで使い切ったとか言ってたくせに、始まると全力で走り出した。クロカンは出来なかったのこっちに参加したおいらは、1本走っただけで酸欠になり、手足が痺^{しび}れていうことをきかなくなった。終わったばかりの北京五輪で、日本男子の4x100が、初のメダルを取ったことで刺激されていたのかもしれない。

「せーの、カンパ〜イ」

待ちに待った夜のバーベキューは盛り上がった。この日を心待ちにしていたボンさんとジョニー、くたびれ果てて動けないと言ってた壮年隊が、楽しそうに飲んでいて、8人ほどいる高校生たちは1カ所に集まって、陸上を離れた同年代の話題に花を咲かせていた。

去年は余った肉が、今年は参加平均年齢がだいぶ下がったので、見る間になくなり、飲み物は中年トリオを中心にどんどん減っていった。

「キツかったッスよホリウッさん、でもこれがあるから頑張れました」

「いや〜、合宿楽しい、ガンガン走ってガンガン飲む、最高ッスねえ」

ジョニー&ボンさんは、砂漠に水のごとくビールを飲み干し、心底楽しそうにうごうごとノドに流し込み続けていた。貴重なワインを誰かが持ってきて、それを飲みながらその席に行くと、

半分残ってるコップに見事にビールを注ぎながらポンさんに肩をたたかれた。「走ることは趣味ではない、俺の人生だ」と言っただけでいいポンさんは、日常的に哲学を語るランナーだった。練習は最後まで思い切りやらないと気が済まないというのも、本人と話してみるとよく分かる。人生のドラマの大半は青春と呼ばれる時期に集中する。ただし、人によってその青春と呼ばれる時間の長短に差がある。この2人にはまだ続いているのでは、と思った瞬間だった。

若い時に競技経験がなく、年齢が高くなってから走り始めた人が本気になると、恐ろしいほどの進化を遂げることがある。実際に甲斐の壮年にはそう言う人が大勢いるのだ。若い頃に高いレベルの競技経験を持つ新海先生、全く経験のない光夫さん、矢嶋くん、飯野Dr、岩瀬Dr、ポンさん。いろんなタイプがいろんな練習法で、自らの経験値を高めていく。とても大切な作業だと思う。

実際の年齢ではなく競技年齢として（ジョギングではなく、本気で強くなろうと思ってから）頂上まで10年は伸びると思っている。30代からジョガーとして再出発したおいらは、自分自身の体を使っていろんな実験をした。当時の高齢の仲間たちとも深く付き合い、かなり突っ込んだ話をした。おかげで様々なデータが手元に残った。

「でもねえ、ほんとにいい人たちと出会えましたよ、1人じゃこんな気分じゃありませんもんねえ、ま、1人じゃやってないと思うけど…」

この時ばかりはキラキラと、若者のような目をして飯野Drが言った。

「大勢で楽しめるのがいいんだよ、野球は9人、サッカーは11人しか試合に出られんけど、マラソンは1万人でも10万人でも、いっぺんに出来るからねえ」

ポンさんは相変わらずグビグビと飲みながら、大きなゼスチャーを交えて納得出来るような出来ないような哲学的なことを話していた。

「そうそう、プロもアマも一緒だし、下手するとオリンピック選手とだって、一緒に走るチャンスがあるかも知れないですもんねえ、小池のアニキにはしっかり付いていきますよ、最大の目標ですからねえ」

今日は頑張りました、と何回も繰り返しながら、飯野Drはそう言って笑ってからまた飲んだ。しばらく、通じてるかどうか分からないような不思議な会話を3人でしていた。

初めて来た下山や慎吾は、気心の知れた仲間たちと楽しそうに飲んでいて、職業もレベルも地区も年齢も出身も関係なく、好きな走ることで集まったメンバーは、時間の過ぎるのも忘れて飲み、食った。仕事が終わって駆けつけた勝保たちも含めて、宿舎に戻っても楽しい時間は続いていた。末木さんが持ってきてくれたプロジェクターで、おいらが持ち込んだ30年にわたるマラ

ソンレースのDVDを観たり、今年の山梨のレースの映像を観ては、大笑いしながら夜が更けていった。

翌朝は嘘のような天気だった。雨に洗われた夏空が帰ってきて、青い背景の中を白い雲が切れ切れになって流れていった。いつも使う準高地のコースが、昨日の雨で状態が悪く、しかたなく同じコースでの練習となった。足元の心配はなかったが、ゆうべは元気だった中年トリオを始め、ほとんどが2日酔いで、スロージョックしか出来ない状態だった。

国体10000mを控えている健太だけが、途中からペースを上げていった。周回遅れで柳や慎吾たちが時々付いてくれ、初めて20キロを超えるトレーニングをこなすことが出来た。スタミナについては自信になった合宿だったと思えた。



小池を追って一斉スタートのトップで走って来たジョニーの勇姿！

「さあ、もうすぐ3キロだ、残り2キロ切ったぞ、思い切っていくぞ」

「先に行って待ってるぞ、最後しっかり頑張ろう」

そう声を掛けてから、動き出した車の流れに乗って監察区間の昭和通りに向かった。小池とも長い付き合いだった。大泉にいる頃から、北巨摩チームとして走ってもらっていた。小池が双葉に越して来てからは、町の陸上部でレース旅行に行ったりと、

更に付き合いは深まっていった。

「来たッ、小池え、さあ行くぞオ、大きく走ろう、腕振って」

「残り1キロちょい、しっかり走り切れ、あそこに見えるぞ」

ずっと何も見えなかった前方に、小さな内田（南アB）の姿があった。残り距離は少ないが、走るたびにその差は詰まっていった。小池はしっかりと大きく腕を振って、半歩でも前に行きたいという思いを身体で表した。

「ソーソーいいぞオ、イチニソーソーイチニソーソー、まだ行けるまだ行ける」

「ファイトだ小池、そーら詰まった詰まった、こりゃ届くぞ」

200mほどあった距離が半分近くになっていた。勾配が、ゴールが近づくにしたがってきつく

なるコースだったが、小池のスプリントなら奇跡が起きるかも知れないと思った。後方の飯野Drは、さっきまでの距離から少しずつ離れてきた。ここで粘れるかどうかという分岐点だった。

「小池さ～ん、ラストで～す、絶対抜きましょー」

「前はバテてます、大丈夫、いけますいけます」

「最後まで頑張りましょーッ、小池さーんファイトでーす」

プラタナスの街路樹が立ち並ぶ広い歩道にチームメイトが次々に現れて、兄貴分的な存在の小池の頑張りに大声援を送っていた。一緒に走りながらの応援もあって、苦しい中での頑張る力になった。しかもその中に、今年結婚したばかりの知佐ちゃんの姿もあって、100人かだった（カコブ）

「さあ、みんなが応援にきたぞ、元気出して行こう」

「よしよし、お前のスプリントをみんなに見せてやれ、届く届く、ソーソー」

どんどん近づいてくる南Aの監督車と、その前にいる内田の姿。しかし、ゴールも近づき、これは無理かな、と思った瞬間だった。この厳しい上り坂で小池が凄まじいスパートを放った。

「そうだ、まだ出る、もっと行ける、さあ頑張れ、16分台が出るぞオオオオッ」

「ゴールが見えたぞ、小池ええええッ、絶対抜ける、お前なら抜ける、行けッ！」

南Aの監督車の上で相川が、^{マジ}本当かよ、という顔をして驚いていた。おいらだって驚かされた1人だ。最後の最後に来てこの走りが出来るなんて、やっぱスーパー中年だと思った。（失礼）相川の車の脇を抜けて、ゴールの市役所に左折する小池の背中が、視界から消えた。この1年の不調を払拭する快走だった。

故障から復活して、最後まで気持ちを切らさない走りでチームを鼓舞^{こぶ}し、しかも16分台の好タイムをマークした小池の走りは、流れをもう一度甲斐に持ってきてくれた。その底力にはつくづく敬服した。トップは甲府の荻が、3年連続の区間賞でテープを切り、南Aの小山、笛吹Aの石原が相次いでゴールしていた。

初日は思わぬ4位という総合順位だったが、4区間で甲斐市新記録が出ており、総合タイムは昨年を2分以上も上回っていた。これだけ走っての結果だからしかたないと思った。最近是个々の設定タイムは伝えてないが、自分で作った総合記録の設定とほとんど同じだった。甲府がここまで走るとは予想出来なかったというのが本音だ。特に後半は流れに乗って気持ちよく走られ、不安のあった高校生にもきちんとタスキリレーをされてしまった。

^{アンカー}最後の小池がいい締めくくりをしてくれたおかげで、明日に向かえる気持ちになれた。まだ

まだ諦める気持ちなど微塵^{みじん}もなかったのは言うまでもない。

「小池、ご苦労さん、最後よく上がったなあ」

駐車場に着き、車を飛び降りてゴール地点まで駆け寄り、市役所の玄関前でまだ汗を滴らせている小池に声を掛けた。

「うん、自分でもビックリさ、あれじゃ、もっと早く行ったらよかったかなア」

荻（甲府）がいるおかげで、区間2位が指定席のようになってしまったが、久々の16分台で気持ちは高揚していた。飯野Drは最後のスパートで引き離されたが、17分25秒で区間4位だった。Bチームでは最高の区間順位だ。甲斐市の壮年の層の厚さを充分証明して見せた。

「いや～、最後キツかったッスよ、小池の兄貴は速すぎます、背中が近づいた時は、途中ちょっとだけ色気が出たんすけどねえ」

玉の汗を浮かべて、飯野Drはおいらの顔を見ながら笑っていた。

「そうだね、中間点じゃかなり詰めたんだけどね、あのまま来るかと思ったよ」

「俺は後ろは全然知らなかったから、ジョニーがすぐ来てるなんて、思ってもいなかったよ」

おいらの言葉に小池が答えた。その後も次々にランナーがやって来た。地元の婦人会の協力で、うどんやお茶などのサービスもあるので、大勢の人でごった返してきた。各チームのスタッフも到着して、レース展開や甲府の大幅な新記録の話題に驚きの声が上がった。あの強い南アAが去年作ったタイムを4分以上も上回り、4時間17分台という破格の新記録だった。特に強いとは思っていた、練習会で一緒にやっている下山が、3区を区間新記録で走って若いチームを流れに乗せ、山田は8区で驚異的な新記録を出してとどめを刺した。



レース前はまだまだ余裕の表情でにこやかサインVだった！

彦の車に中央市の坂野さんも一緒に乗り込んだ。

南アAと笛吹Aに、後半逆転されたのは悔しかったが、その差はまだまだ充分届く距離だったので、再逆転に燃えていた。

監督会議に残るおいらと増田君だけが残り、あとの選手と関係者は昼食の為に河口湖駅前のホテルに移動した。確認事項だけで会議も無事に終わり、初日の成績表をコンビニでコピーして、迎えに来てくれた忠彦の車に中央市の坂野さんも一緒に乗り込んだ。

監督会議に残るおいらと増田君だけが残り、あとの選手と関係者は昼食の為に河口湖駅前のホテルに移動した。確認事項だけで会議も無事に終わり、初日の成績表をコンビニでコピーして、迎えに来てくれた忠彦の車に中央市の坂野さんも一緒に乗り込んだ。

河口湖ステーションホテル…

「優大、腰はどうだ？」

「あ、はい、腰は全然大丈夫です、すいません、後半タレました、練習不足が効きました」

「明日もう1本18区を行け、今日走ってるから返って動くと思うぞ」

「はい行きますッ、絶対頑張ります、最後まで絶対諦めないで粘ります、ありがとうございます」

2日目をどうするか、レース前から悩んでいた。柳が万全であればそのまま行くはずだったが、今日の疲れがあるだろうし、なかなかよく走った菊池という手もあったが、若さという武器に掛けようと思った。菊池と柳を呼んで状況を説明し、サポートに回ってくれるように頼んだ。優大はコースを確認しながら帰るというので、おじいちゃんの串田さんに、早めに送って貰うことにした。

Bの高橋がゴール後に発熱したので、急遽キャプテン勝保に赤十字病院まで連れて行ってもらった。仕事が忙しくて今年はほとんど練習が出来ず、出場することが出来なかった勝保だが、チームの為に出来ることは何でもやります、と言ってくれた。(ほんとに残念だけど、レースから離れると見えるモノもある)

確かに8分という大差は逆転するには厳しいかも知れないが、サンニチのインタビューにも答えたように、一気にではなく1人1人が諦めずに追い、『大砲新海』に渡すまでに3分差にすれば可能性は出てくるのだ。何とか途中で、甲府を慌てさせる展開に持ち込みたいと考えていた。

「明日は朝食は4時半、起床は3時でいいかな」

甲斐のA・B、南アのA・B、中央・昭和と大所帯の全員が夕食をとり、食堂の入口にあったPCで、ホームページに今日の結果と明日への思いを載せた。掲示板はもの凄いにぎわいで、走り終わった選手や明日走る選手が“熱い気持ち”を書き込んでいた。それを見てこちらがまた熱くなるという循環だった。誰1人諦めていないことが確認できて、心の底から力が湧いてくる気がした夜だった。

部屋へ戻り、石川、直樹、長坂、増田、相山、拓パパたちスタッフとくつろいだり、明日の選手への連絡や今日の結果の報告をした。末木、保坂、勝保たちは別の部屋で、本日撮影した動画の編集をしていた。末木さんがホームページにリアルタイムで載せようとしているようだ。こんなスタッフが揃っているチームは他にはないだろう。

今年の2月に末木さんが甲斐市陸協のホームページを開設してくれ、当初は身内の連絡用の小さな掲示板だったが、おいらがあちこちに開設の連絡をしたら、いまでは県内はもちろん県外の関係者や元ランナーまでが見てくれるようになっていた。

まだ早い時間に甲斐の選手部屋に行き、大沢、小田切、岡田としばらく話をしてくる。全員が敷島中出身で、来年大学へ入る岡田、大学3年の小田切、大学出て2年目の大沢と、いろんなことが話しやすいメンバーだった。岡田にとっては、まだ未知の大学生活の様子を、2人の先輩から聞いてよかっただろう。

明日のレース展開を確認して、早めに寝るように指示してから部屋を出た。大沢が帰り際にソッと「大学生に頼ってばかりじゃダメですね、明日は社会人の意地をみせますよ、ホリウッさん」と言ってくれたのが一番心に響いた。

12月14日 午前3時…

窓を叩く雨音で起き上がった。そっと西側の窓を開けると、大粒の雨が降っていた。暗い闇の中から降りてくる雨は、風に煽^{あお}られて斜めに線を引いていた。駐車場の外灯の下の水たまりが、虫のように飛び跳ねているのが見えた。この時間帯に雨ということは雪の心配もあったが、たくさん雨が降ってくれば、積もらずに溶けるかもしれないと思ったりもした。

時間に几帳面な女の子たちが先に起きてきて、身支度を始めた。

「ホリウッさん、駅に行ってホームを貸してもらえるか聞いてきます」

「ああ、頼む、この強い雨に濡れてまで、ジョックやウォークをすることもないからな」

洗面所の隣のソファに座ってテレビを見ていたら、後ろで声がした。階段を降りる忠彦の背中に声を掛けた。

それぞれの部屋から出てきた選手たちと階段を降り、玄関を出て大きく息を吸ってみた。肺に冷たい新鮮な空気が満たされてくると、頭の中がガラスの曇りが取れるようにスッキリした。

50～60mの短い駅のホームだが、屋根があるというだけで気分的に全く違った。今日走る、前半3区間の15～16名の選手が、入り乱れてジョックをしていた。大沢も小田切も引き締まった表情で、岡田はいつものように寡黙^{かもく}に淡々と走っていた。はなはいつものように、自分の世界に入って集中していたし、小栗も同じ仲間がいるので安心しているようだった。Bの高橋が昨日走り終わった後に発熱したので、急遽13区を走ることになった相山は、入念なストレッチを繰り返していた。若い頃には区間賞を何度も取ったことがある相山も、大きなブランクの後では、身体を耐えさせる心の準備が必要だと知っていた。

忠彦が買ってきた新聞を眺めたが、小田切が言ったようにやはり総合4位では写真も記事も少なかった。スポーツの世界は、強くあってこそその話題性だった。ふと横を見ると、激しい雨が線路に跳ねて踊り狂っていた。水の量をたっぷりはらんだ、大きな雨滴だった。

朝食のあと、まだ暗い外を眺めながら何度も繰り返したレース展開を反芻^{はんすう}する。PCで確認すると、掲示板にはすでに選手たちの言葉が載っていた。携帯メールにも返信が届き始めていた。泣いても笑ってもあと1日。選手が持てる力を発揮できるように、精一杯のサポートをしようと改めて誓う。

「大沢、小田切、頼んだぞ、岡田もしっかり粘りの走りをしよう、寒さ対策忘れんなよ」

「はいッ、絶対やってやりましょう」

「はい、ホリウッさん、甲府抜きましょう」

「ハイ、頑張ります」

恩師の新海先生に渡すまでは絶対に諦めない。ゆうべみんなで誓った約束を果たそうと、2人とも気持ちが入っていた。

「うう～、寒いなあ、こりゃ雪が心配だなあ、鳴沢の方は大丈夫かなあ」

気温の低さよりも、冷たい雨で体温が奪われることの方が心配だった。でも、岩瀬Drのメールにもあったが、うちは社会人中心だから、気象条件が悪くなればなるほど、逆にチャンスは増えるだろうと思っていた。

夜明け前 富士吉田市役所…

雨のせいで夜明けが遅く、薄暗い正面玄関はまだほとんど人がいなかった。しばらくするとバラバラとやって来て、車の数も増え、すぐにいっぱいになった。強い雨で庭にはいられないので、ほとんどの関係者が中に入り、1階ホールは朝の山手線のようなようだった。

Aチームの11区のサブに回った佐山が、こんな朝早く、遠くまでわざわざ応援に来てくれた。大会事務局から山日新聞が配られ、まだ見ていない関係者がむさぼるように読んでいた。明日が休刊日なので、今日の結果は火曜の朝でないと載らない。これもレースが1週間ずれたことの影響だった。

「監督会議始めます」

スタート1時間前。コースの注意事項と悪天候による選手の保護の確認があった。すでに電話で、鳴沢方面は雪になっているという情報が入っていたのだ。こちらはまだみぞれ状態だが、走る道路に降り積もったら大変だと思っていた。ま、それでもこれだけの強い雨が朝早くから降っているのだから積雪はないだろうと、この時点では高をくくっていたのが甘かった。

「寒さ対策しっかりな、ただ寒いだけじゃないぞ、雨に濡れると芯から冷えてしまうぞ、少しみぞれ混じりになってきたからな」

1度目のアップが終わったはなと小栗のところへ、みんなが集まっていた。今年の方が落ち着いているはなは、脚にワセリンを塗りながら、南プスの付き添いの沙紀たちと話していた。おいらは肩に掛けていたタスキをはなに渡した。

「しっかり最後まで粘ろう、みんなで力を合わせて諦めないレースをしよう、な」

「はい、分かりました、頑張ります」

緊張感が出てきたはなは、そう言うと口を結んだ。外では広報車が軽快な音楽を流しながら、スタート前の状況や初日のレース結果を伝えていた。

「ラストコールです」

場内のざわめきが、一瞬静まりかえる。ユニフォームに着替え終わった女子選手が、正面玄関に集まっていった。

「1番、甲府」

「はいッ」

「2番、富士吉田」

「ハイッ」

集中力が最高潮に高まった女子ランナーが次々に呼ばれていく。おいらたちは雨の中を走って、昭和通り沿いに止めた車に乗り込んだ。雨は一段と激しさを増し、大粒の水滴がフロントガラスで跳ねていた。

「ちょっとみぞれが多くなったねえ」

運転席の拓パパが、ハンドルにあごを寄せながら上目遣いで空を眺め、いまいましげにポツリとつぶやいた。確かに雨の中に混じって「ビシャッ」という音がして、飛沫が飛び散った。スタートして走っていけば温まるだろうか。心配になって展開を考えたりしていた。

「パーンッ！」

冷たい雨の降りしきる中、17名の女子ランナーが、一斉に、霊峰富士を真正面に望む坂道に駆け出した。おいらたちは1キロ地点手前のコンビニの軒下で、カメラやメガホンを構えていた。いくつかの建物の隙間から、上り坂を、いくぶんゆったりとしたペースで大集団が近づいて来るのが見えた。

「よし、集団だ、このままペースが上がらずにいてくれればいいなァ」

「こんだけ寒いと、飛び出すのはいねえんじゃねーかな」

「出来るだけ中継所に近づいて勝負になれば、全体の差は小さくなるねえ」



土砂降りの雨中のレースとなったが、選手たちはひるむことなく向かっていった！

清水（南アA）、水越（南都留）を先頭に、大集団で右折してきた**11区**の選手たちは、まだ1キロ足らずだというのに全身ずぶぬれだった。アスファルトの路面で白く跳ねている雨の滴は、まるでダンサーのようで、選手の吐く息は真っ白い煙になって、土砂降りの雨の中に消えていった。

「はなッ、ソーソー楽に楽に、ここはまだ力使うな」

「いいぞ、この集団でいけば大丈夫だ、勝負は後半の上りだぞ」

「小栗ッ、その位置でいいからしっかりついて行け」

「気持ちで負けるな、絶対諦めるなよォ」

はなも小栗も集団の中でキチンと対応していた。すぐに車を出したが、大集団がなかなか崩れないので、車線一杯に広がっていて車の流れが悪く、選手になかなか近づくことが出来なかった。

「粘れ粘れ、もう少しで2キロだ」

「気持ち気持ち、しっかり前を見て走れッ」

雨だからと気にして屋根を開けなかったが、熱い闘いに、そんなことは言ってもらえない雰囲気になってきた。おいらは立ち上がって上半身を出し、遠目に見えるはなと小栗にメガホンを向けて叫んでいた。みぞれ混じりの雨が風に乗って、石つぶてのように顔にぶつかってきた。

「少し縦長になったね、どうでえホリウッさん」

「ちょっと差がついたようだね、でもまだまだいくらもないから大丈夫」

足元でタイムを取ってる直樹さんに、おいらは前を向いたまま叫んでいた。4年生になって就職活動もありながら、練習は休まずにやってくれた。もちろん、しばらくは追い込むようなボイントは出来ない時期もあったが、それでも好きな走ることからいなくなることはなかった。

すでにレースは富士吉田警察署前を通過し、この区間の勝負所と言われる3キロからの富士急の上り坂に近づいていた。東農大の中嶋（北杜）が飛び出して、一気に集団が縦長になったので車の流れがよくなり、はなと小栗にかなり接近することが出来た。

「ガマンガマン、ここは集中して粘ろう、前もまだそんなに離れてないから」

「前の背中を見ていくぞ、ここからの上りでまだ詰められるから、ソーソー」

大粒の冷雨に打たれながら、大きな水たまりをバシャバシャと音をさせて走り去った。女子ランナーにとっては、ほんとに過酷な条件だと思った。はなから少し遅れた小栗が、頬に髪を張り付かせたまま走ってきた。

「小栗ッ、ここまでいいぞ、ここからの上りはしっかり腕を使って走れ」

「いい走りだぞ、大丈夫、自信持っていけ、ナイスソーソー」

高校1年生にいきなりの指名だったが、隠することなく走ってる姿は妙に大物感があった。力的にはまだまだ発展途上だが、若い選手はこういう切っ掛けで大きく変わることがある。

先頭争いは中嶋が逃げて、高校生の岸（甲府）と清水（南アA）が追うという展開だった。今年は関東高校駅伝や関東中学駅伝が、すべて山梨開催ということになり、県一駅伝の日程がずれた為に、全国高校駅伝に出場の韮崎からレギュラークラスが参加できず、レース展開はいつもとは違ったものになるだろうとは予想していた。その中でも、大学生の中嶋の力は一步抜きん出るだろうと考えていたが、ここまではその通りの展開になっていた。

「はなァ、ソーソー大きく腕使って走れ、イチニイチニイチニ、いいぞ」

「残り1キロないぞ、さあ、気持ちで負けない、使い切って渡そう」

「はなちゃん、頑張れえええッ！」

早朝から大勢の関係者が、はなと小栗の応援に来てくれた。沿道からの応援はほんとに力になるものだ。走っている選手はもちろん、おいらたちも勇気をもらえる。

「あの信号からラスト300、切り替えて切り替えて、ファイトファイトファイト」

「よーし、上がった上がった、いいぞ、まだいけるぞ、もう1回いってみよう」

寒さで動かなくなった身体を、必死に前へ前へと、気持ちで運んでいた。苦しさに立ち向かっているはなの姿を見ながら、おいらは目の前が曇ってくるのを抑えることが出来なかった。

「はなのタイム、ここまで去年より5秒遅れです」

後部座席の長坂さんがおいらの方に叫んでいた。

「よしいいぞ、はなァ、こんな条件でも去年と同じで来てるぞ、さあ大沢が待ってるぞ、身体ごと飛び込めえ」

河口湖駅前で手を挙げている大沢に向かって、1秒でも速くタスキを届けたいと必死にもがいているはなの背中に、渾身の力を込めてゲキを飛ばした。おいらの声が、激しい雨の中に消えていった。雨で打たれ続けた鼻の奥がツンとした。

「よく頑張った、はなァ、ありがとうォ」

「よく走ったぞォ、去年と同じくらいだぞォ、お疲れさーん」

「しっかり拭いて、風邪ひかないようにしろよォ」

走り終えて濡れた路面に手をついたはなに、通過しながらみんなでねぎらいの声を掛けた。この悪条件の中、よく最後まで粘ってくれたと思った。1年通して、練習会はもちろんクリスタルライン遠走会、富士見合宿と一緒にやっているの、状況は把握できていたし、なにより1人でもキチンと練習をしてくれていることがとても心強かった。

ひとつのレースの勝者は1人ではない。弱気になりそうな己を、意志の力で^{りょうが}凌駕して、最後まで頑張り抜いた時、そこにまた1人勝者が生まれるのだ。

新社会人になる来年の状況は全く見えないが、走ることから離れないで欲しい。アスリートでもジョガーでも、元は「走るのが好き」というのが原点だろうと思うから…。まずは仕事に慣れて、社会人としての生活のサイクルを構築するのが先決だろう。(ジョニーやボンさん、おいらたちは逮捕されないようにしようね)

Bの小栗は、中盤ではなの前に出るという積極性を見せて、その後もよく粘り、12位で岡田に中継した。

「大沢ッ、この寒さだ、前半は無理するなよ」

「いい動きしてるぞ、温まるまではこのままいこう」

12区の大沢は、去年のリベンジと社会人の意地で、タスキを受けると思い切り突っ込んで入り、すぐ前にいた河野（中央・昭和）を抜くと、点々と見えているランナーを激しい気迫で追った。みぞれ混じりから雪へと変わってきた河口湖畔に、熱い思いを胸に抱いて走り込んで行った。

「3キロ通過、9分11秒、いいぞリラックス出来てるし、リズムもあるぞ」

「前はどんどん近づいてるぞ、5キロから車付くからな」

まるで北国のような前方からの猛烈な雪だった。車から上半身を出しているおいらに容赦なく降り注ぐが、選手が頑張っているのにそんなことには構っていらなかった。足元にも雪が舞い

落ち、車のシートが濡れるのでバスタオルをバサバサと置いた。

「ここで待ちましょう」

5キロ地点の小海三叉路に、ほとんどのチームがいた。湖畔の柳の枝が振れだして、風が出てきたことを知らせた。しかも、その風は凍^こえていた。おいらは頬に当たる寒風に口元をゆがめた。雪は大粒でますます激しくなり、これからもっともっと標高の高い鳴沢まで上っていくというのに、どうなってしまうんだらうと心配になった。

「来たッ」

「よーし、まだまだ行けるぞ、いいラップだ、お前と小田切で甲府を捕まえるぞ」

雪の降り続く中、湖畔道路から現れた大沢の頭は、すでに白くなっていた。市川（都留）を抜いて8位に上がると、山口（大月）と青木（南都留）をまとめて抜いて来た。ここから更に過酷な走りが続くことになる。去年と全く同じような展開で、すぐ後方から岩澤（笛吹A）が、猛烈な勢いで迫って来ていた。17秒差をここまで詰めて、この後の上りで勝負を掛けるつもりなんだろう。

「さあ行こう、ここからは一緒に行くぞ、大沢ッ、元気出していこう」

「前はかなり近づいてきたぞ、お前の得意な上りで勝負しよう」

湖畔道路に別れを告げて、左折するとすぐに激しい上り坂だった。岩澤は監督車のすぐ後ろまでやって来た。大沢に伝えるのは、岩澤が車の前に出てからでいいだろうと思っていた。

「そう、いいぞ、今日は力強いぞ、イチニイチニイチニソーソー」

「いいリズムだ、よく動いてるぞ、自信持っていこう、寒いのはみんな一緒だ、悪条件は嫌がったヤツの負けだ」

短い急坂を上り、今度は右折してしばらく下り、足和田村から本格的な長い上りが始まる。去年はここで岩澤に置いて行かれたが、今年は振り返ると心なしか、車の後方の岩澤との距離が開いていた。

「岩澤キツそうだね、大沢のペースがいいから、付いて来れない感じだね」

「うん、走りもちっと無理してる感じだよね、ここまで大沢が、去年のラップをかなり上回ってるからねえ」

おいらと直樹さんは、大沢と岩澤を交互に見ながら話していた。その前の南プスの2チームも、姿がだいぶ大きくなってきた。車の走った跡はアスファルトが見えるが、それ以外は雪化粧という感じになってきた。選手にとっては心身ともに厳しいレースとなった。気持ち折れたら一気にタレそうな条件だった。

「いいねえ、今日はほんとにいい動きだ、一旦近づいた岩澤がどんどん離れていったぞ、お前のペースに付いて来れないぞ」

「さあ、来た来た、前が近づいたぞ、大沢ッ、このリズムで行けば抜けるぞ」

「ファイトだ大沢、頑張れ大沢、ナイスだ大沢、ソーソーいいぞッ」

この悪条件の中、大沢はいい動きをしていた。岩澤の調子が悪いというより、大沢が去年よりかなり速いペースで上っていた。特に長い上りに入ってからフォームがよく、路面がシャーベット状になって走りづらい筈なのに、後方から見ていると力強い蹴り足だった。後ろの岩澤を見事に引き離す快走だった。これなら去年の記録をかなり上回りそうだと思う。

13秒差で中継した内藤（南アB）がなかなか近づかないうちに、その前の草間（笹崎）と近藤（南アA）の姿が大きくなってきた。

「よしッ、お前のリズムの方がいいぞ、遠慮するなガンガン行けッ」

「その前も見えてきたぞ、ひとつずつ抜いて行こう」

練習会で常に一緒に走っている草間を捉えようと、近藤とも40～50mの距離になっていた。Bの内藤が粘り強く走り、Aの内藤を抜いてからも相川の叱咤を受けてよく頑張っていた。

「大沢ァ、その前の北杜も見えてきたぞッ、今日の走りは最高だ、ナイスラン」

「前は一杯一杯だ、さあ一気に走ろう」

前方のジープの上で、忠彦と斉藤が振り返って大沢の姿を見つめていた。こんなに早く捕まるとは思っていなかったとみえ、2人とも、これはヤバイという雰囲気を書かせていた。その前方には中嶋の力走でトップを走っていた小清水（北杜）が、山田（甲府）に抜かれ、2位に落ちていた。

差が10mを切った時に、大沢がペースを切り替えた。

「近藤ッ、ここで付かなきゃだめだ、しっかり対応しろッ」

「絶対諦めるな、粘れ粘れ」

斉藤と忠彦が抜かれた瞬間にゲキを飛ばした。大沢は弛めることなく距離が開くまでしっかりペースを上げ続け、10m以上離してから元に戻した。おいらたちも南アAのジープの前に出て、大沢の背中を押し続けた。雪で濡れた冷たい身体が、熱くしびれてくるような感覚で、おいらの内なる心に広がっていった。

「よし、そうそうイチニソーソー、イチニソーソー、負けるな大沢」

周囲は北国の真冬の風景そのものだった。一面の雪で、モノトーンの世界に入り込んだような気分だった。選手の吐く白い息と荒い呼吸音、バシャバシャとシャーベット状の路面を蹴る音と

車のエンジン音しか聞こえない世界。おいらは一度目を閉じた。

11月13日 夜 緑ヶ丘競技場…

「お願いしまーす」

「こんばんわァ」

「ごくろうさ〜ん」

いよいよ本番まで1ヶ月となり、三々五々、仕事や学校を終えて集まってくるメンバーの表情も引き締まってきた気がする。

「じゃ、用意できたらいくぞ、レスト10分とります、しっかり全力で走れるようにうまく使ってつなげよ、頭の中にレースのイメージ作って集中してな」

いつもなら組み分けするが、今夜はレペションなので全員同時スタートとした。大沢、下山、山田、岩澤たちが、71~72秒で引っ張り、各チームのエースたちが静かに火花を散らしていた。少し遅れて、柳、拓磨、岩瀬、松永、大地、飯野、小池、志村、新海、高橋、本田、はなたちが続き、草間や慎吾、優、穴水、八巻ら他チームの選手も必死にくらいついていた。

「レースのどの辺を走ってるか、しっかりイメージして走れッ」

特に付いていだけで精一杯の中高生には、1周ごとに声を掛けた。耳の聞こえない本田には、大きな身振り手振りで伝え、残り周回数は指で示した。中学生もジョガーも、大勢のランナーに交じって懸命に走っていた。

「はい、8分55、56、57…、最後までしっかり腕引いて」

ストップウォッチを見ながら、末木さんと相川が読み上げる。おいらが順位を確認しながらノートに書き込んでいく。毎週繰り返される風景だった。

秋になって調子を上げてきた大沢は、この日の3000+2000+1000のレペを、8'56、5'50、2'44の好タイムで、すべて先頭集団で走り切る気概を見せてくれた。「大沢強し!!」の印象を他チームに与え、甲斐全体のレベルの高さを改めて示した。

「ホリウッさん、全部社会人になってからのベストです、やったァ」

そう言って大沢は白い歯を見せた。

キツイ練習のあと、芝生やトラックで気のあった仲間たちと、楽しそうにダウンジョックをしているメンバーを見ていた。大勢で走ると会話が弾み、精神的にもリラックスできる。それが回復効果も高めるとおいらは信じていた。よくレースや練習後に、座り込んで長い時間喋っているのを見るが、クールダウンは直後が大切なのだ。走りながら話せばいいことだ。



激しい雪の中でも気持ちを切らすことなく、6人抜きを演じた大沢の激走！

「8キロ過ぎたぞッ、残り4キロだ、絶対気持ちで引くな、ここまで頑張ったんだ、最後までしっかり走りきろう」

「あそこを右折したら付けないから、先に行って待ってるぞ」

「大沢ァ、ファイトファイト」

国道139号へ右折し、監督車はしばらく走ってから道端に止めて大沢を待った。雪はますます激しさを増し、国道

に出ても一面雪景色だった。屋根から上半身を出してメガホンを持っている手が、固まって開かなくなっていた。それに大型メガホンの中に雪が降り積もり、かなり重くなってきた。

「よし、前と14秒差、北杜とは48秒差だ、大沢ッ、しっかり詰めよう」

「ここまでよく頑張ったぞ、あと少しだ、最後まで使い切ろう」

かつてないほどの過酷なレースは、終盤を迎えていた。各選手とも気力を振り絞っての闘いだったが、この悪天候の中でのレースは見ている者を涙ぐませた。

6人抜きという激走で、頭を真っ白にして中継所に近づいてくる大沢は、なかなかその差を詰められなかった内藤のすぐ背後まで迫っていた。その前の小清水も100mちょっとの差まで追い込んで、勢いよく小田切にタスキを託した。使い切った大沢の姿を見て、おいらはにわかになが燃え立つような気がした。

力のある山田（甲府）には負けたが、区間2位の走り、夜遅くなっても1人でドラゴンを走った成果が実を結んだ。Bの高校生の岡田は、この悪条件にはさすがに対応できず、山梨と富士吉田に抜かれて順位を14位に下げた。

「大沢ァ、ご苦労さ〜ん、ナイスガッツだ、よくやったぞォ」

「ほんとはよく頑張った、最高の走りだったぞォオオオッ！」

「小田切ッ、頼むぞ、厳しいけどあとはお前に任せたぞ」

「足元気をつけてな、お前の走りをすれば届くから大丈夫だ、ファイト！」

「絶対甲府（依田）まで行くぞ、強気で行けッ」

この悪天候の中で、大沢に続いて**13区**の小田切も、もの凄い突っ込みをみせた。26秒前に中継した八巻（北杜）を、1キロ過ぎで背後に迫るという走りをしてスタッフを驚かせた。この区間3年連続登場の小田切には、全幅の信頼を置いていた。2年連続の区間新記録に昨日の走り。チームの為にどんな走りを求められているかをしっかり理解していた。

「いいぞ、厳しいのはみんな同じだ、嫌がったら負けるぞ」

車から降りて声援を送るスタッフの前で、シャーベット状になった路面ではなく、歩道近くの深い雪の上を走ってきた八巻を抜くと、すぐ前を走る小沢（南アB）に襲いかかった。まるで「狙いはただひとつ」とでも言いたげに、目もくれずに小沢をかわすと、見えない甲府を追って一目散に駆け下りて行った。自分に科せられた使命を果たそうと、小田切は雪と苦しみの中に走り込んでいった。辺りはこんもりと雪をかぶって無音の世界となっていた。

岸、山田の好走もあって、甲府とは2分近い差となっていたので、姿を確認することはなかなか出来なかった。

「トップと1分38秒ッ」

雪の降る早朝から声援に来てくれた関係者が、沿道から教えてくれた。

「小田切ッ、いいぞ、前と詰まってきたぞッ、ここは我慢して押していこう」

「そうそう、いいペースだ、まだ区間新も狙えるぞ」

「ファイトファイト、応援が増えたぞ、元気出して元気出して」

ついに2位まで上がり、上位戦線での流れに乗れた。あとは首位を追うだけだ。ここで捕まえてしまえば、レースの流れは完全にうちに来るだろうと思っていた。しかし、この距離が遠かった。小田切は懸命にペースを維持しようと歯を食いしばっていたが、足元の悪さに加え、中盤を過ぎる頃から更に気温が下がり、身体が硬直しているのが見ていて分かった。

走り去る車がシャーベットとなった雪を跳ね上げ、選手の身体に降りかかった。冷えている身体を更に冷やし、手足の感覚がなくなっていくような状態だろうと思われた。

「8キロ通過、まだ大丈夫だ、この坂をうまく上りきれ」

「ファイト、小田切、みんなペースは上がってないぞ、お前の走りはいいぞ」

赤池のバス停付近で、監督車に、二枚重ねでしていた厚手の手袋を窓を開けた運転席に放り捨て、再びスイッチを入れた。



これほどの悪条件の中で、小田切は首位（甲府）だけを目指して走り続けた！

「よしッ、もう1回行けッ、こっから勝負だ」

手袋を一枚投げることで、何とか切り替えようとした小田切だったが、上りで勢いよく上げたペースが最後まで持たずにキツくなった。気持ちはあるのだが、寒さで身体が動かないもどかしさを味わっている感じだった。

「もう少しだ、もう残り

3キロ切ったぞ、小田切ッ、諦めずに行こう」

おいらは車の後方から来る小田切が、顔をしかめて必死に前に行こうとしている姿に「これ以上ゲキを飛ばしていいのか？」という思いがフッと浮かび、思わずメガホンからの声が裏返ってしまった。選手はみんなこんな状況の中で、相手と自分と雪と寒さと闘っていた。鼻の奥がツンとして、顔に降りかかった雪が溶けたのか涙なのか分からない状態で、どうしても大声を出すも裏返ってしまうのだった。さっきの言葉がおいらの耳元で旋回していた。誰かに言われたような気がして思わず後ろを振り返った。

「よーし、ラストラスト、誠二が待ってるぞ、思い切って行け」

「小田切よく頑張ったぞォ、ナイスファイトだァ」

寒さに震えながらもラストで切り替えて、小田切はびしょ濡れの身体で誠二の待つ中継所に飛び込んでいった。

「ご苦労さん、よくやった、小田切ありがとう」

「お疲れさん、ゆっくり休んでから来いよォ」

こんな天候の中で、中間点では自らの持つ区間記録の更新も可能なペースで突っ込んだが、最後は寒さで身体がいうことをきかなかった。それでも『小田切崇』の走りは見せてくれ、甲斐市は必ず上位にいるチームだということを証明してくれた。昨日の高橋の熱発で、突然の出走となったBチームコーチの相山は、生涯初の雪中レースでひとつ順位を下げて15位でのタスキリレ

ーとなった。

4年連続の**14区**の誠二は、見慣れた風景といつもの展開に、落ち着いて監督車の前を走り始めた。

「さあ、熱いタスキをつないできたぞ、しっかり走ろうぜ」

「天気には負けないで、元気だして行こう」

これまでの2区間に較べれば、雪の降り方はだいぶ収まってきていた。時折雨混じりで、周囲の景色もうっすらと白いモノが見えるだけだった。

1人練習がほとんどの誠二は、今年になってフルマラソンを2時間35~36分で立て続けに走り、スタミナには何の心配もなかった。年齢の近い菊池や年上の小池たちと話しては、練習法を工夫して力を維持していた。もしかしたらあるかもしれないという程度の区間も含めて、1人で試走をこなし、準備は万全だった。もし、ということもあって、昨日は出走する選手と同じ時間に起きて準備もしてくれていた。

「3キロ通過、いいぞ、このまま押していくぞ、さあ、あそこに甲府が見えてるからな、絶対あそこまで行こう」

本栖湖の反対側に、白バイの点滅が見えていた。視界に入ると人間は元気が出るものだ。寒さで動かなかった身体が少しずつ温まって、気持ちも乗ってくる。



雨に打たれて長い下り坂を駆け抜ける誠二の闘魂！

「ホリウッさん、どんくらいの差分かる？」

「さっき計ったら1分50秒くらいだから、少し詰まってきたね」

田村（甲府）には勝てると踏んでの誠二起用である。何とか詰めて欲しいと願わずにはいられなかった。一気にこちらのペースにして、前半で昨日の遅れを取り戻したいと考えていた。

今日は走らないことになった菊池や柳が、沿道からカー杯声援を送り、トップとの差を

教えてくれた。甲斐市の関係者もどんどん増え、2位まで上がったので応援隊もかなり熱くなっていた。

「さあ、あとは下るだけだ、1回リラックスしよう、そうそう、トンネルから思い切っていくぞ」

「いいよ、ナイス切り替えだ、そうそう身体を預けていこう」

中之倉トンネルの中で、YBSの車が誠二の姿を映し続けていた。甲斐がここまで上がってきて、奇跡が起これば、この映像は大々的に使われるだろうと思った。昨日の4位は不本意だったし、その順位だとメディアの扱いはほとんどなかった。選手のテンションも上がらなくなる心配があったほどだ。やはり注目されて頑張る、そのパターンがスポーツ選手にとっては一番いいだろうと思う。

「ホリウッさん、7キロ通過タイム、去年より30秒遅れてます」

記録を取っている長坂さんが、立っているおいらの足元で言った。

「うん、動きが固いままだから、なかなかペースが上がらないんだよね、いい仕上がりだったんだけどなァ、ここからはタイムは伝えないでいこう」

おいらは、一度車内に顔を入れてそう言ってから、再び立ち上がって、メガホンを誠二の背中に向けた。

「リズムリズム、自分のリズムで行くぞ、ソーソー、イチニィソーソー、イチニィソーソー、よし、良くなったぞ、行ける行ける、そうだそうだ、さあ、コーナーふくらみすぎないように、そう最短距離で回ろう、カーブは出口でスピードアップ、いいぞッ」

休みなく声を掛け続け、何とかペースに乗せようとリズムを取り続けた。いつの間にか雪はほとんどなくなり、下からの風と共に雨が時折強くなったりする程度になっていた。

「誠二さん、ファイトです、ここ頑張りましょう」

「前もかなりバテてます、いけますいけます」

「清水さ〜ん、ガンバガンバ、走りよくなってますよォ」

走り終わったのはなや大沢、小田切も来て、ほとんど人気がない沿道で声援を送ってくれた。仲間の声援が力にならない筈はない。誠二の背中から首筋にかけて、はっきりと「負けてたまるか」の意志が見て取れた。

「そうだ、もう後半戦だ、気持ちで押していこう、絶対負けないぞ、ソーソー」

「もう少しで10キロだ、切り替えていこう」

上を見上げると、後方のチームが追い上げてきたのが分かる。まだカーブふたつあるが、ここに来て一気に詰まってるのと、複数のチームが競り合ってるようだ。チーム事情で、毎年2日とも最長区間を走っている中村（笛吹A）は、去年も最後に誠二をかわして区間賞を取っていた。

「誠二、後ろから来るぞ、ここまで来たんだ絶対逃げるぞ」

「さあ、右折するよォ、もうラスト1キロちょっとだ、しっかりタスキを渡そう」



後方からやって来たのは、下りが得意だとは思えなかった坂本（北杜）だった。中村はその後ろから必死の形相で迫っていた。どこのチームも、3位以内には何としても入りたいと思っている筈だ。

「引くな引くな、ここまで来て後ろに付いちやダメだ、そう強気強気」

「いいぞ上がった上がった、そのまま最後まで行くぞ」

ラスト勝負に一歩も引かないで全力のスパートをかけ続ける！ 大学生になって5000mに14分台を出した皓太が、背後からスパートして抜きにかかったが、一瞬早く誠二が対応して抜かせなかった。2人の競り合いに中村が付いていけず、ほんの少しだけ差が開いた。甲斐の車の前に2人、後ろに1人。参宮司橋が見えて残りは上りの200mだ。

「負けちゃダメ、気持ちは絶対引くなアアアアッ！」

2人はもうすでに数百mに渡って、全力のスパート合戦をしていた。中継所の群衆が見えた時、それまで後方にいていっぱいだと思った中村が、渾身のスパートを放って2人の背後に迫った。もつれるようにタスキを渡した3人は、もんどり打って倒れ込んだ。精根尽きたというのはこういうのを言うんだらう。

「お疲れえ、誠二、ご苦労さーん」

「後で来いよォ、待ってるぞォ、最後よくがんばったぞ」

ペースが思うように上がらず苦戦したが、若い大学生相手に最後まで引かない走りを見せた誠二は、全てのエネルギーを使い切って、しばらく動ける状態ではないだろうと思った。ねばり強さを買って起用されたBの飯野Drは、監督車からのゲキを受けて苦しさを楽しみ、順位を保って長い下りを走りきってしまった。

独走となった田村（甲府）は、大差のリードがあった為に気負うことなくマイペースを守った安定走行で、区間9位ながら悠々とトップを走りきった。

係員の指示が悪く、3台の監督車が中継所を通過するのに手間取り、**15区**の選手に追い



夢にまで見た伴走車付きのレースで心ゆくまで苦しんだ！

ついたら拓磨が3人の先頭を走っていた。風も少し出てきたが、ここは熱い走りをしてきた誠二の思いを受け取って、前に出してしまうのはしかたないだろうと思った。逆に、ここで後ろに付くような弱気を見せたらマズいと思ったほどだ。

「拓磨ッ、いいぞ、お前のペースでしっかり走れ」

「あのトンネル越えたら1キロだぞ、あとはしばらくお前の得意な下りだ」

力のある市川（笛吹A）が落ち着いて若い2人の後ろに付き、いつでも行くぞというように、腕を何度か下げてリラックスして走っていた。しばらく走ってから追いつかれる、というシチュエーションが一番いいと思っていたが、いたしかたない。

「1キロ3分ちょうど、いいぞ、さあ、こっから下りだ楽に行くぞ」

「拓磨ァ、いい動きだぞ、自信持っていけ」

今年の拓磨は好不調の波が激しく、毎年走っている大月の一斉は早くから柳を含めた候補者から出すと決めていたので、本人の希望もあり古関の試走をする予定だった。

11月24日 河口湖試走～

「大沢さん、ファイトでーす」

おいらの助手席で、河口湖畔を走る先輩に声を掛けていた。12.1キロをキッチリ走りきった大沢の着替えが終わるのを待って、

「拓磨、今日はここ（13区）を走ってみろ、ほとんど下りだし距離も11.8キロだ」

「はい、わかりました、途中ちょっとだけ上りがあるんですね」

「あんなのは、勢いで行くんだよ、構えないで、下った勢いで走ればいいんだ、小田切はいつもそうだから」

「はい、じゃあ行きます」

そう言って走り始めた拓磨は、後半はきっちりペースを上げて本栖湖レストハウス前までやって来た。晩秋の陽はどんどん西に傾き、周囲の山々の木々の紅葉は、終息に近づいていた。

「どうだ、そんなに長くないだろう」

「そうですね、割と短く感じました、上りもそんなに気にならなかったし、景色が同じで目標は何もないですけどね」

そう言ってダウンを始めた拓磨を眺めながら、おいらは配置を決めかねていた。小田切がいないメンバー構成で、どうやって流れを作っていくかを思案していた。

甲斐市にとっては貴重な下りランナーだが、持ってるスピードを持て余し、なかなかレベルを上げきれなかった。トラックで結果が出せず、直前の練習会でもきっちり走ることが出来ず、不安を抱えたままで12月を迎えた。状況によっては、サブのままになる可能性さえあり得た今回のレースだったのだ。

「ここまでナイスランだ、そのまま強気で行けよ」

「拓磨ァ、もう3キロ過ぎたぞ、今日の気合いは凄いぞ」

若い小池（北杜）は、1キロ過ぎからの2人のハイペースに付けず、だいぶ後方に下がっていた。一度下りに入って横に並び掛けた市川だったが、すぐに拓磨がペースを上げたので、再び後ろについて走っていた。表情は見えないが、2人の激しい火花が短い距離の間にバチバチとぶつかり合っているようだった。

「5キロ通過、15分9秒、いいぞ、勝負はこっからだ、いまのリズムでいけッ」

「いい走りだ、拓磨ァ、ナイスファイトだ」

速いペースだった。下りがあるとはいえ、ここまではいいリズムで、2人のフォームには余裕さえ感じた。

「ここだ、しっかり対応しろ、そうそういいぞ」

最初に動いたのは市川だった。まるで6キロ地点を待っていたように、タイミングを計って仕掛けた。一瞬遅れた拓磨が、2mほどの距離を詰めてすぐに並んだ。ちょっと様子を見た、という感じで再び元の形に戻って併走が続いた。

「拓磨ァ、いいぞォ、ナイスガッツだ、頑張り頑張り」

「負けるな負けるな、絶対離れるなァァ」

「残り3キロだ、我慢して付いて行けッ！」

応援隊が到着して、菊池たちがノドも張り裂けよとばかりに、ノーガードの撃ち合いをしている拓磨に、歩道を走りながら熱い熱い声援を送った。一度も拓磨の前に出ることなく声を掛け続けているので、どんな表情をしているのかは分からないが、背中に気迫を感じておいらは胸が熱くなった。高校1年からずっと見ているが、これほどの気迫を感じたことはない。短いとはいえ

途中にある苦手な上り坂も、力強く上りきり、自分のリズムを崩すことなく走っていた。

「ここで遅れたらいままでと同じだろッ、ここが大事だッ、絶対負けるなァァァッ」



何度も続く熾烈を極めたスパート合戦はお互いの気力の勝負となっていた！

3度目の市川のスパートはこれまでより強く、今度は一瞬ではなく明らかにジリジリと遅れた。おいらの叫びに「ウオッ！」と叫び、大きく腕を振って、その距離を詰めようとペースを上げた。市川もペースを落とさないでなかなか詰まらなかったが、^じ焦れた市川が後ろを振り向いた瞬間に再び並び、そしてなんと前

に出た。

「拓磨ァ、最高だァ、今までで一番いいぞ、あと2キロ、最後まで勝負しろッ」

「ナイスガッツだ、30分台出るぞォ、粘れ粘れ」

後半の平地になってもそれほどペースが落ちず、かなりの好タイムで走っていた。市川相手にこれだけの勝負をするとは思ってもみなかった。おいらは余りの凄まじい展開に、早くもノドをつぶしてメガホンを持つ手が震えていた。2人の背中から炎が上がっているようだった。

「残り1.5キロ、相手もきついぞ絶対諦めるなァ」

「みんなが応援に来たぞ、拓磨ァ、この差で行けば最後でまくれるぞ」

最後の勝負に出た市川のペースアップに、ジワジワと距離が開いた。しかし、大勢の応援の力を借りて、その差は20~30mのまま中継所に近づいていった。さすがに上体がブレでしたが、おいらの“腕を振れ”の言葉にしっかりと反応して、懸命に前を追った。

「ラスト400、拓磨ッ、残り1周だッ」

「手塚が見えるぞ、勢い付けて渡せ、最後まで諦めるなァ」

右手にタスキを握り締めて、練習会でのラスト1周のつもりで必死に走った。チームの為に走った。全力で走った。手塚が手を振っていた。

「拓磨ァ、よくやった、凄かったぞォ」

「いいもん見せてもらったぞォ、ナイスランだ」

「お疲れさん、後で来いよォ」



過去に走ったことのあるコースで快走！

使い切った拓磨にみんなで声を掛けた。拓磨のレースでこれほどの思いを抱いたことはなかった。鳥肌が立つほどの激しいレースだった。これは拓磨にとってはターニングポイントになるかも知れない。初めて区間上位で走りきったこの日が、突き抜けるレースとなるか。

Bの矢嶋君は50代にもかかわらず、一般区間を攻めの走りで区間11位と健闘した。

「手塚ァ、じっくり攻めろ、お前の走りをすれば大丈夫だ」
熱いタスキをもらってそんな言葉を掛けても無理だと思
ったが、**16区**の手塚は速いペースでも焦ってはいな

かった。後方からは、15区の矢崎（南アA）の区間賞の走りで勢いをつけたまま追い込んできた去年のチームメイトの土橋（南アA）が、猛烈な突っ込みを見せて、その差を50mほどにしてきた。

「1キロ通過、3分8秒、いいぞ、さあもう少しで上りになるぞ、勝負はそこからだ、しっかり走ろう」

「上りきったら勝負しよう、前がいい目標になるぞ」

スタート後は少し離れた前方の内藤（笛吹A）が、上りに入ったら見る間に近づいてきた。手塚は慌てることなく同じリズムで上り、その差をグングン詰めた。一旦すぐ背後まで迫ってきた後方の土橋も、2キロ手前の上りからジリジリと離れていった。

「いいぞ、そのリズムだ、イチニソソーイチニソソー」

「後ろは心配しなくていいぞ、前だけ追うぞ」

しっかりと内藤の位置を確認してから、視線を落として急勾配の坂道に挑んでいった。この坂は距離は短い、頂上に近づくにしたがって勾配がきつくなる。それは試走で確認済みで、しっかり対応できているのが分かった。

11月30日早朝 六郷試走～

おいらの自宅から5分ほどの家まで迎えに行き、2人で六郷へ向かった。日曜の早朝、まだ車

もほとんど走っていないコースに走り出した手塚を車で追った。人通りもなく、空気が澄んで、寒さもそれほどでもない爽やかな朝だった。

「ここが1キロ地点な、もう少し行ったら上りになるぞ、長さはいくらもないからな」

「はいッ」

手塚は走りながら返事をして、距離を告げるたびに周囲を確認して記憶しているようだった。気になったトンネルも問題なく通過し、下りはいくぶんペースを上げて気持ちよく走りきった。そのリズムカルな腕振りと軽快なピッチは、本番での好走を期待させた。

「どうだった？」

「はい、距離も短く感じましたし、アップダウンもこれくらいなら、大丈夫だと思います」

「お前が力通りに走れば、ここなら間違いなく区間賞争いだよ」

「頑張ります」

次の区間が一斉スタートなので、1人しかタスキを渡せないと言うと、「だったら絶対トップで渡したいですね」と言って笑った。走る後ろ姿が春先とは違うのでそのことを言うと、距離に対応するために自分で変えたという。脚の振り出しから振り戻す動きに無駄がなくなってスムーズになり、力が前に前にと伝わっているのが分かった。

去年は県勢初の、中学駅伝日本一という勲章を手に入れたが、それにおごることなく冷静に、自分を見られる目を持っていると感じた。高い意識で競技をしているので、これからを楽しみにしていきたいと思っている。見上げると、空はきれいに晴れ渡り、頬に当たる風が心地よかった。

「さあ、上りはもう少しだ、追いついたら一気に行こう」

「いいぞ、手塚ア、このままのペースでいいぞ、前はかなりバテてるぞ」

大学生の内藤が上り坂に苦しんでいた。手塚はトンネルの手前でピッチを上げると、スルリという感じで抜き去り、前に出た。トンネル内は歩道を走るからと言ってあったので、その前に抜いてしまおうという考えだろう。

「ナイスペースだ、ソーソーいいぞ」

「トンネル内は気をつけてな、自分のペースで行っていいぞ、そうそう」

800mもあるトンネルを走るなんて経験はないだろうから走りにくいはずなのに、手塚は淡々と走っていた。対向車はもちろん、前後にいる監督車の騒音と掛け声が反響して、ウワンウワンと耳に入ってきた。振り返ると、追い込んできた土橋が逆行となった光の向こうに、黒い影となって踊っていた。



冷静に相手を追う手塚の走り！

出口が近づくと、一旦離れた内藤が再び背後に迫ってきた。内藤は監督車からのゲキにへて、下りに入った途端にスパートした。慌てずに対応した手塚は、表情を変えることなく背後にピッタリ付いた。

「いいぞ、あの橋渡ったら4キロ地点だ、残りは3キロ、トップの甲府も見えてきたぞ」

「2人で一緒に追い込んでいけッ」

内藤が後ろを確認しては何度も仕掛けるが、動じることなく対応している手塚を見て本当に高校1年かよ、と思ったのはおいらだけ

ではないはずだ。しかも、2人で競り合っているうちに、全く姿が見えなかった内池（甲府）が視界に入ってきた。それは11区以来、今日初めてキチンと見る甲府の姿だった。

「行けそうじゃんね、まだ手塚の方が余裕があるもんね」

「相手が大学生だし、まだこの距離だと少し不安なのかなあ、内藤キツそうだけど」

直樹さんとおいらは、併走する2人を見つめてそう言い合った。内藤のペースが速いというより、無理せず後ろに付いている感じの走りだった。手塚は力を貯めながら機をうかがっていた。

「よしッ、出たら一気に行けッ、いいタイミングだったぞ、そのまま行こう」

「ナイスランだ、後ろはキツくなったぞ、遠慮するなどんどん行け」

おいらの“残り2キロ”の声に反応して、手塚はカミソリのような強烈なスパートを放った。内藤は何かか付こうとしたが、スピードの切り替えが激しく、返ってフォームを崩して見る間に遠ざかっていった。リズム感、力強さ、上半身のリラックスと、どれをとっても高校1年生の後半の走りとは思えなかった。

「さあ、トップ（甲府）があそこにいるぞ、約束通り絶対にタスキを渡そうぜ」

「ぐんぐん詰まってるぞ、手塚ア、お前の走りの方がずっといいぞ」

狭い街中の道路に車が渋滞し、歩道がないために車の間を右に左に蛇行して走るはめになり、かなりのロスを強いられた。試走の時に確認した黒沢の郵便局前を過ぎて残り1キロになると、確実に内池の後ろ姿を確認できた。監督車の窓から、不安そうにこちらを見るスタッフの顔まで分かる距離になった。

「よし、よっしッ、あそこまで絶対行くぞッ、みんなをビックリさせよう、ソーソーイチニイイチニイソーソー、まだ出るまだ出る、もと出るぞッ」

「手塚ァ、頑張れえええ、絶対抜けるぞオオオオ」

「ラストラスト、相手はもう上がらないよォ」

鰻沢口駅の踏切を渡り、残り500mを切った。甲斐市応援隊が大拳してやって来ていた。獲物を狙うハンターのように、鋭い走りで見ると間に内池を追い込む手塚を、みんなで鼓舞した。

「ぐるっと回って中継所だぞ、届く届く、和希が待ってるぞオオオッ」

「大きく大きく、もう1回行こう」



目の前に見える甲府を追って必死のスタートをかける

いた。若い選手には挑戦させることが大事だと、つくづく感じた見事な追い込みだった。

タスキは渡らなかったが和希にその強い思いは伝わり、熱い走りをする力になった。なにより、初出場での区間賞は見事だし、駅伝の走り方を理解していた。これからがほんとに楽しみになった。

「手塚ァ、お疲れ、よくやったぞ、凄い走りだ」

「ゆっくり休んでから来いよォ」

「よく頑張ったッ、ほんとによく走ったッ」

歩道を歩く手塚に向かって声を掛け、車はそのまま和希を追った。15、16区の若い2人の走りが、再びレース展開を上位争いに引き戻す要因となった。

Bの本田は、大会前からメディアに取り上げられ、安全の為にということでバイクの伴走を双葉の福士さんをお願いした。遅れてきた監督車から、スケッチブックに指示を書いて見せるアイディアでのいだが、一斉スタートで飛び出してしまったりで力を使い過ぎ、後半バテてしまったようだ。しかし、大会前後に取材が相次ぎプレッシャーを心配したが、それは全くなかったようだ。むしろ、楽しんでたフシがある。

残ってるエネルギーを絞り出すように、目の前の内池を追い込んだが、最後のあがきで内池がスパートすると、そこが中継所だった。和希は手を出したまま、名残惜しそうにスタートしていった。そのビハインドはわずか4秒だった。「やっぱ残り3キロで行かせればよかったねえ、まだ余裕あったんだよねえ」

直樹さんが、心底悔しそうに首を振りながら

そう言った。おいらも確かに失敗したと思って



拓也の初の県一周駅伝は雨中の一斉スタートとなった！

相変わらずそうそうたるメンバーが揃ったこの区間から、唯一地元を走る19、20区は、一度でいいからトップを走りたいと強く思っていた。

和希を先頭に、昨日の区間新男の下山（甲府）、そして早川（南アA）、社会人のトップクラス岡部（笛吹A）、大学生では笹子までの山登りで和希と秒差で区間2位だった東海大の島崎（甲州）、今年秋に29分台に入った城西大の八巻（北杜）、と多士済々だった。そのメンバーを従えて、和希がトップを引き続けていた。

「いいリズムだ、そのままでいいぞ、今日も頼んだぞ和希ッ」

「動きはいいぞ、自信持っていけよ」

この1年しっかり力を付け、ハーフの距離もこなせるようになった和希は、持ちタイム以上のレベルにあると思っていた。練習会で見慣れた大柄な下山、早川が後ろにいるので和希の姿はチラチラとしか見えなかった。

「少し前に行って声掛けしよう」

和希の作るハイペースで7～8人に減った先頭集団を抜いて、しばらく走って車を止めた。

「よし、強気でいけ、自信持って走れ、いいぞ和希ッ」

「フォームもいいぞ、このまま押していけ」

「ファイトファイト和希いいぞ」

トップとほとんど同時に来たので、そのまま**17区**の和希の後ろ姿を見ながら後方に待機出来た。雨は全く心配なくなったが、今度は八ヶ岳おろしが吹き出して、ここからの区間はもろに向かい風の中を走るようになった。

「和希ッ、マイペースな、合わせるな、自分のリズムで行け」

この向かい風の中、小柄な和希が先頭を引っ張り、1人で風を受けていたが、手塚の熱い走りを見せられて燃えない方がおかしい。ここは強い気持ちで引っ張る和希の思いに任せようと車内で話し合っていた。

「もうすぐ5キロだ、しっかり^{つな}繋ごう」

その後、早川がハイペースにたまらずペースを落とし、この中では一番力があると思われた八巻が、生彩を欠いたフォームで集団の後方を走っていた。島崎は昨日負けているのでピタリ和希をマークし、下山も前に出ることなく慎重に走っていた。岡部はだいぶキツそうで、いっぱいかなと思わせる上体の揺れが始まっていた。



向かい風を突いて和希が先頭を走り続ける！

春先に少し体調を崩した和希は、夏からしっかり練習が出来るようになり、秋になって元気な走りを見せるようになった。トラックではなかなか結果を出せていなかったが、ロードに減法強く駅伝には欠かせないタイプだった。

「さあ、ここから勝負だ、風を嫌がると負けるぞ」

「気持ち気持ち、絶対引くなよ、ソーソー、みんな応援してるぞォ」

中間点を過ぎ、後半戦に入ると、表情は辛そうではなかった八巻が呆気なく集団からこぼれた。4人残った中では岡部の上体の揺れが大きくなり、しばらくすると

とジリジリ離れていった。そこから和希を頂点に歩道側に下山、センターライン沿いに島崎というピラミッド型の陣形で、北風に立ち向かって行った。

「あれ、なんか和希遅れてない」

いつの間にか車の量が増えて、先頭に近づくことが出来ずに遠目に眺めていたら、3人の集団の後ろに和希の姿があった。

「そうだね、後ろに下がった感じだね」

直樹さんも目を細めて、前方を凝視してからそう言った。ずっと風よけで引っ張り続けた和希が、下山の仕掛けと、それにかぶせた島崎のペースアップに付いていけなかったのだ。しかし、強気で攻めた結果だった。大事なことは心が折れていないかどうかだった。

「粘れ粘れ、ここ大事だぞ、しっかり最後まで粘ろう」

「まだこの差なら大丈夫だ、石原ファイトファイト」

20～30mの差を維持して粘っている和希に、みんなが声を掛けた。押していけるようになったのが一番強くなった証拠だろう。

「優大が待ってるぞォオオッ」



タスキは18区の優大へ、さあ、残り3人でしっかり決着をつける

「お疲れさん、ありがとう」

和希はちょっと顔を歪めて悔しそうな表情を見せた。Bの橋本は、1年生にもかかわらずチーム事情で2日目も走り、区間12位とまとめてみせた。



Bチームは高校の後輩から先輩へのタスキリレーで終盤へ

「タスキに勢いつける、そうそう、いいぞ和希ィ」

「残り400、最後まで諦めるなァ」

今度は車が前になり、走ってくる和希に向かって後ろ向きで叫んだ。力を余すことなく使い切り、^{こんしん}渾身のタスキを3番目で優大に託して和希は手をついた。この風の中で去年と同タイムで走った力は本物だった。

「和希、ナイスファイト！」

まだ2日目の勝負の決着はついていなかった。甲府の完全優勝は何としても阻止したかったし、アンカーがゴールするまでは何が起こるか分からないと思っていた。

「まだまだ諦めないぞ、あそこにいるんだ、目を離すなよ」

「優大、タスキの力を借りて頑張ろう」

「目標は見えるから大丈夫だ、しっかり背中を見て追っていけ」

2日目初登場の**18区** 優大は、昨日のリベンジをしたいという強い思いでタスキを掛け、春仙美術館前を飛び出し、小川（甲州）と菊島（甲府）の背中を追った。このコースなら充分菊島には勝ると踏んでいた。何とか地元をトップで通過したいという願いがあった。2年連続この区間を走った^{りょうた}金丸は、東京で研修医という厳しい状況にあり参加できなかったが、「こちらから応援してます、優勝に向けて頑張ってください」とメールを送ってきた。

11月3日 西湖畔 県高校駅伝

男女とも7年ぶりに留学生のいないレース。

男子は10年間代表権を取り続けた学院付属高が、力を付けた1～2年生主体で2月の新人駅伝で負けた農林高とどんなレースをするかが焦点だった。久しぶりに、早朝から駆けつけた関係者のピリピリしたムードが寒さを吹き飛ばした。大会全体の雰囲気も、これまでとは全く違い、予想の付かない展開を暗示しているようだった。

秋になって故障で出遅れてしまい不参加となった優大は、1年ぶりに復活した同じ2年生の1区の進藤に付き添っていた。

「あ、ホリウッさん、おはようございます」

「おはよう、どうだ、勝算は？」

「勝ちますよ、俺を全国に連れてってもらわないと困りますから」

優大はそばにいる、少し緊張気味の進藤を元気づけるように、明るく笑いながらそう言った。

「ところで、お前の方は大丈夫か？ その後どうだ」

「もう全然平気です、昨日も5000mバンバン走りましたから、もう心配いりません」

走れるようになったのが心底嬉しいらしく、力を込めて答えた優大だった。

しかし、レース展開は大方の予想を裏切って思わぬ流れになった。出場7名の5000m平均タイムが14分台という山梨県史上最高レベルの学院付が、1区の2年生エース対決で内藤（農林高）に1分19秒の大差を付けられるという展開だった。2区3区も農林が連続区間新を出す驚異の走りで、3分近い差までリードを広げ、勝敗はほぼこの時点で決着してしまった。タイムも14年ぶりの大会新記録で、10年分のうっぴんを一気に吐き出した感じだった。農林高は、駅伝と言うよりロードでの強さを見せつけての完勝だった。

両校の選手14名のうち、3年生は学院付4区の寺田1人という若いチーム同士の戦いだった。駅伝はトラックの持ちタイムの比較だけではなく、流れが大切だということを改めて再認識させられた試合だった。来年はこの2チームに、ほぼ1年生だけで3位に入った葎崎高を含めた三つどもえの戦いになりそうだった。

女子は1区で、学院付の力のある一年生深田が田中（葎崎）に15秒しかリードを奪えず、2区白滝で逆転すると、以降葎崎高が全て区間賞を奪う走りで一方的に差を広げ、独走優勝した。個々のレベルも高く、全国大会での活躍が期待できるレースだった。

「前と詰まってきたぞ、このペースで押していけば大丈夫だ」

「頼むぞ優大、先導車が大きくなってきただろう、絶対ここで詰めような」

いいリズムで序盤を乗り切り、トップとの距離が詰まってきた時に菊島が小川に追いつき、2人で競り合う形になってペースが上がリ、思うように近づかなくなった。駅伝ではこういう展開が一番厳しい。

「我慢我慢、ここはしっかり粘ろう」

「前もキツイから我慢してればペースは落ちるぞ、粘っていけ優大ッ」



しっかりと前を追う姿勢を見せて監督車の横を走る優大ね、こっちの気持ちが切れなきゃいいけど…」

直樹さんと、後方の優大を眺めながら話していた。

「さあ、あの信号の先の郵便局で中間点だ、気持ち切り替えよう」

「優大ッ、まだお前のペースはいいぞ、集中して前を追うぞ」

後方から大学生の坂本（南A）が迫っていた。2日間走るなんて聞いてなかった。しかも、2日ともよりによって優大の区間に来るとは思わなかった。故障から回復せず、ずっとレースに出てなかったし、最近になってやっと出場した記録会のタイムを見ても、これほど走るとは思えなかったのだ。

「坂本が行くから、うまく対応しろ、一緒に行けば前と詰まるぞ」

その通りだった。追いついてきた坂本のペースがあまり速くなかったので、しばらく粘っていると、菊島から置いて行かれた小川が、すぐ前まで近づいてきた。

「そうだ、いいぞ、トップとも詰まってきたぞ、もう少し我慢しろ」

「いけるぞ、優大ここで詰まると捕まえられるぞ」

菊島との差もジワジワと詰まりだした時、優大が坂本のペースに付いていけなくなった。地力の差が徐々に出て、少しずつ引き離された。しばらくすると、4人が等間隔で走るようなレース

表情に厳しさはあったが、まだ上体のブレもなく、走り自体は安定していたので期待できた。練習不足さえなければ、長い距離を安定して走れる能力は高いモノを持っている。昨日のレースが刺激になって、今日の動きを良くしてくれることを願った。

「ああやって一緒に行かれるとヤバイよねえ」
「ほんと、小川はだそうたいぶん近づいてたのに、並ばれて付いて行っちゃうと差が詰まらないじゃん

になった。

「もうちょっとの我慢だ、粘ろう、残り3キロ切ったぞ」

「あの上りで、もう一度頑張れ、先頭はバテて来たぞ」

御勅使橋の手前には地元に近いとあって、いままでの比ではない応援隊が詰めかけていた。上りの得意な優大だが、さすがにキツくなってきた身体では、思うようにリズムを切り替えられなかった。坂本は小川もあつと言う間に抜くと、先頭の菊島にも追いついて、竜岡に向かう上りを併走していた。ここでまた差が開き始めた。

「さあ、上りきればあと2キロだ、最後の踏ん張りだぞ」

「串田ァ、あと少しだ、頑張れええええ」

「前も結構バテてるぞ、まだ行けるぞ、ファイトーッ」

最後の上りを懸命に走り、上りきった所にいたスタッフに声を掛けられて、切り替えた優大だったが、そこまでが精一杯だった。下り終わると脚が止まり、気持ちだけでタスキを運ぼうとするが、意志に反して身体は動いてくれなかった。走ろうとする意志と、弱った身体の間を生じる大きなギャップ、優大の中で葛藤かっとうが続いていた。

「残り500切ったぞ、さあ、もうフォームはいいぞ、とにかく大きく走れ」

「岩瀬先生が待ってるぞオオオオ」

「見えた見えた、よしここまで来い、よく頑張ったぞ、ラストだ優大」

ラストのもがきは気持ちで支え、「ご苦労さん」と言ってタスキを受けた岩瀬Drが走り出すと、その場で手をついた。

「よく粘ったッ、お疲れ優大ッ、ありがとう」

「ゆっくり休んでから後で来い、待ってるぞ」

遠ざかる優大にそう叫び、先を急いだ。この悔しさを次のレースにつなげて、成長の糧かてとして欲しいと願った。Bの榊原はアップダウンも落ち着いて走り、総合順位を保って社会人の杉田にリレーした。

この**19区**も昨日のリベンジだった。笹子の結果はそれほど悪かった訳ではないが、本人は甲府に抜かれたというのが、後半のチームの流れを悪くしたと悔やんでいた。

「先生ッ、あとは頼みます、まだ今日の決着は付いてないから」

「絶対に表彰台行きましょう」

こちらをチラッと見て、しっかりと頷いてから舟山橋に走り込んでいった。ここまでいい勝負をしているのに、総合タイムではまだ昨日と同じ4位のままだった。

ここの勝負は、上位3チームが全て高校生を使ってきたので、状況によってはかなりチャンスがあると思っていた。しかし、プレッシャーをかけられる場面を作ることが出来ず、あとはガチンコで、岩瀬Drの勝負強さに掛けるしかなかった。

「向こうで待ってまーす、先生よろしくッ」

橋を渡って、車はコースに入れないので右折してルート20を走り、双葉支所前の広場へ向かった。すでに広場は一杯で、強引に縦列駐車をさせてもらった。よっぽどのアクシデントがないかぎり、甲府のトップは動かないだろうが、その何かが起きるかも知れないと思ってしまうのが駅伝という競技だ。

「お疲れえ、甲斐市頑張ったねえ、ホリウッさん」

地元とあって、知った顔が次々に声を掛けてきた。いつかはここをトップで走ってみたいと思って、すでに十数年が経っていた。自分の代では無理でも、これだけ地域上げて盛り上がれば、必ずや近い将来に出来るだろうと思った。

「来たぞッ」

坂本からトップでリレーされた南アAの笹本が、ちょっと苦しそうな顔で走ってくるのが見えた。続いて上田（甲府）がバネを効かせて走りすぎると、しばらく間があって、ここまでの距離で雨宮（笛吹A）と荻原（甲州）を抜いて、岩瀬Drが3位で現れた。

「よしッ、行こう」

「さあ、先生、最後だよ、地元を元気出して走ろう」

「みんなで応援してるよォ、しっかり締めくくろう、ソーソーいいよ」

ここからの3キロは、まともに旧双葉町の中心を通るので、道の両側は町内と市内の応援隊で溢れかえっているはずだ。自宅のすぐそばを走る岩瀬Drにすれば、ここはいいところ見せたいと思うのが当然だった。

「この上りで少しでも詰めよう、気持ちで負けないよォ、絶対引かない」

「しっかり腕振って、そうそう、いいよォ、イチニイイチニイイチニイソーソー」

中央本線のガードをくぐると、あとはしばらく上るばかりだった。この区間はこのラスト手前の1キロ足らずの上りが、相当身体にダメージを与えた。見る間に追いついたり離れたりの場面を、何度見たことか知れない。

「岩瀬先生ッ、頑張ってるえええ」



「ガンガン行こう」これだけの応援を受けて思い切り突っ込んだ

「甲斐市いいぞォ、大丈夫だ、まだ行けるよ」

「しっかりィ、もう少しだよォオオ」

上り坂の歩道を走りながら応援する者。声をそろえて大声援を送る人たち。名前で呼びかけてくれる声援は地元ならではの。コース沿いの家々から出てきて、声を張り上げてくれる人も多かった。これが力にならない筈がない。おいらのゲキにしっかり応えて、このメイン通りを力強く上った。何度もこんな場面があったと、脳裏に浮かぶ映像を振り払い、掛

け声に集中した。

「さあさあ、これだけの応援団がいるんだ、パワーもらってしっかり頑張ろう」

「岩瀬先生、後ろはもう見えなくなったよォ、前を少しでも詰めよう」

雨宮（笛吹A）との差が不明だが、これだけ離せば逆転したか、もしまでも、アンカーで楽に差せるだろうと思った。あとは南アAだが、1年生の笹本の姿が前方に見えないのがとても悔しかった。見える範囲でプレッシャーを掛けられる闘いが出来れば、また違った展開になったろうと思えたからだ。

「残り1キロ切ったよォ、全部使い切ろう、そうそう残さないよォ」

「ラストラスト、全力で走り込もう、よーし、上がった上がった」

昨日の朝出発したシルバー自動車の前を通り、すでにスタートしてしまった山交敷島バス停前の中継所に身体ごと飛び込んだ岩瀬Drは、大勢出ている甲斐市の役員に抱きかかえられていた。

「先生ありがとう、ナイスラン」

「お疲れ様ア、ゴールで待ってるよォ、ほんとにありがとう」

40代になってからも一般区間にこだわり、2人の高校生には負けたが、しっかりと区間3位で走りきる気持ちの強さ。長い付き合いの中で、どれほど助けられてきたことか。上りも下りも出来るジョーカーとして、宿泊準備は必ずしてもらって、2日目の選手に何かあれば穴を埋めてもらった。

Bの杉田は2本目も、社会人の安定感を見せて区間13位で走り切ってくれた。そして2日間の

締めくくりは、大ベテランの光夫さんに託された。

「ワーッ、来たッ！」

南アAの笹本が下り坂を勢いよく走り込んできて、タスキを**20区**の有泉に渡すと同時に、一斉に16名のランナーが飛び出した。見慣れた光景だが、その勢いはとても50代とは思えないスピード感に溢れていた。長い2日間の闘いの最終章だった。

「新海先生ッ、頼みまーす、頑張ってえええ」

「先生、逆転してねえ」

この年代ではダントツのレベルの新海先生に対する関係者の期待は、とても大きかった。スタートからBの光夫さんと2人が先頭を切る。真っ赤なユニフォームが先頭争いをしながら白バイの後ろを行く。甲斐市にとっては夢のような光景だった。

40代も含めて、甲斐市の壮年部門の構成は強力だった。そこら辺の高校生でも勝てないのだから、その強さが分かるというものだ。練習会のBグループを引っ張る新海先生や飯野Dr、小池や岩瀬DrはAグループでやることも多かった。

今年は、春先は仕事の関係で練習不足になり、夏には腰を痛めて全く走れない日々が続いた。楽しみにしていた富士見合宿も、ウォーキングとスロージョックで過ごすという悔しさを味わっていたのだ。しかし、地道に努力して先月の県長距離記録会で、飯野Drともつれるようにゴールし、5000mを16分45秒で走れるまでに戻してきた。もちろん、去年から参加しているハケ岳ロードレースも、部門別で連覇したのは言うまでもない。若い頃の記録を超えようとするのではなく、あの頃の感覚を^{よみがえ}蘇らせるためにレースを続けていた。

「新海先生、ファイトオオオオ、後ろ離れたよォ」

「もっともっと離してえええ、逆転出来るよォーッ」

力が抜きん出ているので、前半から独走となり、あとはどれだけ離せるかだけだった。2日目の総合で甲府を逆転できるか、2日間トータルで、南アAと笛吹Aを逆転出来るか、という大きな期待がかかっていた。たった5、8キロの距離で、その期待を背負ってしまうほどの力を持っていることが、『大砲新海』と呼ばれる^{ゆえん}所以である。ここまで、甲府と2日目のタイム差は1分38秒差、南アAとの総合タイム差は3分27秒差、笛吹Aと49秒差となっていた。

「甲斐市がんばれッ」

「すごいなア、独走じゃん」



期待通りに完全な独走で現れた「大砲新海」

山の手通りの沿道には人が多く、その見事な走りに驚愕^{きょうがく}して声を張り上げる観衆が大勢いた。

「何とか間に合ったね、ここで降りていい？」

おいらたちは近道をして北口へ急ぎ、新海先生の到着前にゴール地点に着いた。北口駅前再開発の途中で、すっかり建物がなくなった周囲は、武田通りまで見渡せた。昨日の朝、ここで内田や鶴沢に声援を送ったのが、随分むかしのここのように感じた。

選手のほとんどが集まり、『大砲新海』の到着を待った。各チームの関係者も集まりだし、ゴールテープの周囲は人でごった返していた。

「新海先生だッ」

「先生えええッ、ラストです」

「行けます、先生行けます、頑張ってください！」

武田通りから白バイに先導されて駆け下りてくるその姿は、年代別の区間だと言われなければ分からないほどの、スピード感溢れるフォームだった。左折して駅前を駆け抜け、さらに左折してゴールというコースなので、姿が見えてからテープを切るまで、たっぴり新海先生を応援出来た。まるでトラックレースのラスト1周を見ている気分だった。

「先生、ラストラスト」

「頑張ってください、新海先生えええッ」

「先生、カッコイイッ！」

持ち前のスピードで駅前とゴール付近に溢れた観衆の前を、驚異の走りを見せつけてゴールテープを切った。400m近く見渡せるコースに、2番手のランナーはまだ見つけることが出来なかった。

「大丈夫、まだ来ないよ、あ、あれは山梨市と秋山（中央）だッ」

とにかく甲府、南アA、笛吹Aとの差だけが気になった。新海先生のゴールから1分以上が経過して、2、3番手が入ったが、総合争いをしているチームではなかったので安心した。そのあと新藤（韮崎）、佐野（西八・南巨）に続いて、なんとBの光夫さんが6番目で観衆の前に現れた。

「光夫さ～ん、ファイトファイトオオオ」

「ナイスガッツ、お疲れさ～ん」



久しぶりの大会でもキチンと結果を出した光夫さん

「よっ、甲府はまだ来ないね、いけるねこりゃ」
光夫さんから70~80m遅れて笛吹Aの佐野がゴール。堀家（甲府）と有泉（南アA）はそれからかなり遅れてゴールした。必死にタイム差を計っていると、

「やったやった、ホリさん、うちが3位だ、今日は甲府を抜いて、甲斐がトップだよ」

携帯サイトで確認していた末木さんが教えてくれた。集まっていた選手たちと喜びが弾けた。抱

き合って喜びを爆発させるほどではないが、最低限の表彰台確保という喜びと、2日目にあの甲府に勝ったという思いで、みんなの顔がほころんだ。

新海先生と堀家（甲府）とは2分17秒の差だったが、実際に3分差で総合優勝がかかってタスキが渡ったら、どうなっていたらろうか？ と一瞬だけ思いを馳せた。

「お疲れ様ア、新海先生ありがとう、何とか総合3位に入れたようです、それに今日のトップを取れたみたいだし」

「あ、良かったア、何とか力になれましたね、3位と4位じゃ全く違うもんねえ、よかったア」

新海先生は玉の汗を滴らせながら、柔らかい笑顔でおいらいにそう言った。朝からの冷たい雪が嘘のように、日差しも出てきたゴール付近は、気温も上がってだいぶ暖かくなっていた。

「お疲れえええ、みんなよく頑張ったぞ」

順位が決定して、集まった選手や関係者と、やっとゆっくり話することが出来た。全体的には、甲斐のレースは充分出来たと思えた。距離の長い難しい2日目という課題を克服したことは、大きな財産になると思う。甲斐のレベルが確実にアップしていることをアピールできた。3、4、5、7、12、15区の甲斐市新記録に、17区のタイ記録。1日目も2日目も、そしてもちろん総合タイムも新記録。この結果は誇りに思う。

Bチームも、目標のヒトケタには届かなかったが、ほとんど高校1~2年生と壮年だけで一般区間を走ったことを考えれば、よくやったと言える。課題もしっかり見つかったし、来年以降は上に行くだけなのでとても楽しみだ。

閉会式で、集まったAチーム全員が銅メダルを掛けてもらい、小田切、和希、手塚、新海先生の4人が区間賞の表彰を受けた。県一周駅伝のレベルが年々上がり、安定して走れるチームが強いのはもちろんだが、流れを一気に変えられるランナーも何人か必要になってきた。毎年のように

に総合タイムが塗り替えられることを考えれば、山梨全体のレベルが上がってきたのを肌で感じる。

12月14日 三幸食堂…

「お疲れさまァ、カンパァィ」

昨日の朝5時前から始動し、長い長い2日間の戦いだった。選手、スタッフの緊張感、関係者の協力、いろいろな形で関わってくれた大勢の人たちによって、初めて2チームが無事に走り終えることが出来たのだ。

「4、3、2位で、次に優勝なんてうまくいけば一番いいけど、急がないこんだよ。今回3位でも、たいしたもんだと思う。ここで1回力を貯めて、次を目指せばいいさ。このチームなら必ず勝てると思います」

今年も2日間、送迎と付添いをしてくれた小田切（善）さんの言葉が、胸にズシリと響いた。周りからも同じことを言われて、プレッシャーになっていなかったか。選手にも同じようにプレッシャーを掛けていなかったか。思い当たることはいくつかあった。

それでもやはり、表彰台から降りなかったというのは凄く大きかった。閉会式にただ出るだけでは、チーム全体のモチベーションを維持するのは難しかった。大事なことは常に上位にいて、一番上を目指せる体制（気持ち）を持ち続けることだ。

「お疲れさまでしたァ」

「Bも何とか走り切れてよかったねえ」

「いやあ、それにしてもあの雪にゃあ、まいった」

A&Bのスタッフも大会終了の安堵感で、表情がゆるんでいた。勝てなかったとはいえ、惨敗感のない敗戦なので立ち直りは早いだらうと思っていた。

「必ず優勝争いの中にいれば、絶対勝てるよ、いい勝負してるもん」

直樹さんがおいらのコップに注いでくれくれながら、言い聞かせるようにそう言った。

「うん、読みは間違ってたと思う、ただ故障だけはしかたないよねえ」

おいらも飲みながら答えた。難しいと言われる2日目を獲ったので、それが支えになっていた。すぐにはイメージはわからないが、若い選手も含めてチーム全体が、“しっかり走れば勝てる”という思いを抱いてきた雰囲気を感じられた。

選手たちは緊張感から解放されて、楽しそうに食べたり飲んだりしていた。1年間ずっと一緒にやって来たスタッフや関係者も、結果はともかくやっと落ち着いて飲むことが出来た。



石川副会長の『甲斐市限定MVP』の名前入りの立派な楯を、Aは小池と大沢、Bは橋本と岡田に贈呈し、増田君、光夫さんからのプレゼント贈呈もあって更に盛り上がり、選手講評でガチャピンのぬいぐるみ姿で現れた増田監督の登場で、会場は笑いの渦に包まれた。

締めくくりは恒例の、中学高校の先輩後輩で行う『えっさっさ』だった。相山、勝保、大沢、小田切、拓磨に、今年は新たに岡田、松永、石水も参加して、上半身（パンツのヤツもいたか…）裸で、日体大名物を見事に演じきった（笑）



今回の話題の中心で、みんなに可愛がられた本田（拓）が、卒業しても陸上を頑張ると宣言し、来年の大会でのリベンジを誓い、大喝采を浴びた。Bで走った高校生が「来年は絶対Aで走りたいです」と言ってくれたことが、陸協関係者に無理言って、Bチームを作ってもらってほんたによかったと思えた瞬間だった。レースで覚えることはたくさんある。

それは、レースでは毎日のトレーニングでは絶対に経験できない心理状態を経験するからだ。

上を目指すのは個人もチームも一緒だと思う。相手はもちろんいるけど、チーム内の競争もある程度なくては、頂点は目指せないと感じていた。始めた時は選手確保が大変で、何としても底辺（選手のみならず関係者も）拡大が最大目標だったが、だいぶ広がってきた今は、切磋琢磨の雰囲気を作り出せないダメだと思った。

楽しい慰労会には終わりがなく、キリがないのでいつものように小林邸に場所を移して延々と続いた。若い選手のほとんどが集まり、いつものように、「来年こそは」の言葉が飛び交った。（オオカミ少年ではないよね、ハハハ…）

おいらは終わったという安堵感と、緊張が解けた疲労感と、アルコールの酔いがないまぜになった不思議な気分で、若者の話を聞いていた。

2008年は狙った結果ではなかったかも知れないが、3年連続で優勝争いに入れば、もう立派な強豪チームです。次の大会まで、それぞれのステージでしっかり頑張っ、練習会、記録会、

遠走会、合宿を含めていろいろ企画するので、それをうまく使ってレベルアップを図ろう。社会人にはもちろん楽しい納涼会や忘年会もあります（クー）



みんなア、ありがとオオオッ
またみんなでつなごうぜえ
自分に負けないで

1年間しっかり頑張れえええッ
感動したぞオオオッ！

甲斐市選手のみなさん&関係者の方々

ほんとにありがとうございました…。

- ★今年も写真が全員なくて申し訳ない思いをしました。何人かの家族や関係者にもらいましたが、2チームになった為にさらに大変になりました。来年もまた、よろしくお願いします。写真のない選手の方々、すいません。
- ★かなりくたびれたパソコンで打ち込み、ゆっくりとしか出てこないジェットプリンターで印刷するので、時間ばかりかかってしまいました。文字はにじむし写真はキレイに出ないけど、我慢して下さい（笑）
- ★この不況下での対策として、文字をかなり小さくして（目の悪い方ゴメンナサイ）ページ数を20~30%減らし、インクはネットで詰め替えを購入しました。色は少し悪くなるけど…（泣）

ホリさんのつづやき…

問答無用で結果が全てというのは、競技成績によってお金を稼ぐ、プロスポーツの世界である。もちろんアマチュアでも、ある程度結果が大事なことは当然だが、そこに到るまでの経過がどんなものかを知ってもらいたい気持ちが強い。(でも結果出さないとダメなこともあるんだよ)

やっていることは間違っていないと信じているが、結果に結びつかないのは何が原因なんだろう。確かに今回の甲府は個々の選手が強かったが、それだけで勝敗が決まるならレースは必要ない。チーム全体をもう一度見直して、いつも勝負できる【甲斐】でありたいと思う。みんなで楽しみながら、当面は自己の研鑽^{けんざん}に励もう。

実業団でもない一般社会人にはまず仕事があり、守らなければならない家庭や家族や生活があって、その上で、好きだから自分の時間を削ってやっている、というのが実情です。1年を通して、心身共に同じ状態を維持するのは大変なことです。だから季節を区切って、それぞれに目標を分けてやっていくと気持ちが持つと思う。練習は苦しいけど、仲間がいると結構楽しく向かっていけたりするもんだよ。イベントを上手く使って、自己コントロールしながら続けていこう。走ることが、仕事や勉強、普段の生活をしていく上で、励みになれば一番いいと思ってます。



10代から50代まで、中学生、高校生、大学生、社会人、市民ランナーを含めた大家族のようなチームが、たった1本のタスキを運ぶ。こんな試合は他の競技にはありません。そこに面白味を感じるのです。もちろん、日常の目標はそれぞれ違います。地域の代表として1年に一度だけ、みんなで気持ちをひとつにして、山梨県で一番を目指そう。代表というのは選ばれし者です。一般の人から見れば、羨ましい一握りのランナーなのです。いろんな人生模様が詰まっている駅伝、それがこの

『**山梨県一周駅伝**』です。思い切り楽しもう。駅伝は決して算数ではありません。

4年目を迎えてみんなの気心も知れて、他チームがうらやむくらい、ほんとにまとまりのあるいいチームになったと思う。4年前に数人で始めた緑ヶ丘の練習会が、まるで山梨県の練習会のようになってしまったのも、甲斐市の選手会のおかけであることは言うまでもない。選手・スタッフ・関係者、これほどまとまって動けるチームはないと自負しています。たった1回

の連絡で30人を越えるメンバーが、すぐに集まる《納涼会》や《忘年会》。

選手が大勢集まるようになった、敷島走友会主催のクリスタルライン遠走会。年齢や職業というジャンルを飛び越えて、心をさらけ出せる仲間なんて、こんなことをしてないと出会えないよ。『フォア・ザ・チーム』。この大会が終われば明日からライバルとなる。でも、仲間として戦い、一度作り上げた絆はなくなることは決してないはずだ。

AもBも同じ甲斐です、向かうものが違う訳ではありません。お互いに年を取った時に、この時代を振り返って、心から笑い会える、そんな未来（とき）が来るといいなあ。

スポーツ選手にとって、自分自身がレベルアップしていくのが分かるというのが、一番楽しいことだと思う。最近よく思うのだけど、長距離選手に身体能力の差なんて、それほどないのではないかと感じてます。練習を長きに渡って継続できる才能と、創意工夫の能力があれば、かなりのレベルまでいけると思ってる。「不可能」の反対語は「挑戦」です。

年齢が高くなれば体力的な衰えはしかたないが、身体の使い方（技術）と頭（神経）の開発はいくつになっても出来るのでは、と思う。練習方法なんてどんどん新しく開発されていくだろうし、数年後、あるいは十数年後には、いまやっている練習なんてないかもしれない。だってホリさんたちの高校時代のトップレベルより、いまの中学生の方が速いんだから…。

進歩とは、それは失敗を修正することから生まれるものでしょう。先人が間違っていたと思うことを削っていけば、それだけ成功率は上がるはずです。そうやって無駄を省いていくんです。

（でも、とても大切な無駄もあるんだけどね）

正直言って、長距離の練習は厳しいと思う。寒風吹きすさぶ冬を乗り越えて、春に走れる楽しさを満喫して、夏の地獄の暑苦しさを仲間と共に過ごしていくと、秋からのシーズンに身体が変わっているのに気づくでしょう。自分の力を信じて、決して諦めることなく、未来（うえ）を目指して突き進もう。幸い山梨は、地形と自然に恵まれています。うまく利用すれば大変効果のあるトレーニングが可能です。即効性のある練習なんてありません。階段を一段ずつ上がって、踊り場でちょっと休んで、また一段ずつ足を掛ける。そんなことの繰り返しです。

走りだけでなく、苦しい時はいろんな場面で必ず来る。自分自身を高めるためにも、逃げずに真っ正面から受けて立とう。自分ひとりの為に戦うと思っただけはダメです。自分ひとりの為なら、苦しくなったらそこで諦めてしまうから…。君らの後ろには、仲間やスタッフ、地域の関係者、支えてくれる大勢の人たちがいっぱいいることを忘れるな。

自分の力を出し切った時ほど爽快な気分になれることは、人生の中でも、それほどあるもんじやない。これだけは経験しないと分からないものなんです。

相手をやっつける為でなく、自分自身を高める為に他のランナーと競い合うのだと考えれば、少しだけ頑張れるかも…。自分を負かすことが出来るのは、ライバルではなく自分自身なのです。着順と勝つことは無関係だと思ふ時がある。悔しさは絶対必要だし、悔いがなくなったらそこで終わってしまう。悔しさが残るからこそ頑張れる。それがなくなったらたぶん、努力をしなくなってしまう。「負けたことがある」というのが、いつか大きな財産になると思う。

長い時間長い距離を走る長距離レースだが、勝負は一瞬にして決まることが結構多い。諦めたらそこで試合終了です。大切なのは精神的なタフさ、やる気（熱意）、決意（意志と忍耐力）、自信、感情のコントロールです。

日々の練習で心身を鍛え、現在の自分を越えることを夢見て、いろんな障害を乗り越えよう。四季の素晴らしさを感じられるのは、外にいてそれぞれの季節を直接浴びているからです。それにしても、春が待ち遠しいですね。

風を切り裂き

雨と闘い

雪にも負けなかった

おのれの フライドを賭けた走り

君ら全員の 背中を眺めた2日間

とても大切なものを 見せてもらいました

勝ちへの執念と勝利に飢えた その目

上を目指す気持ちは 持ち続けよう

ライバルは 昨日の自分だから…

いろんな人たちからいろんな応援をしてもらって、2チームが無事に2日間の長丁場を走り終えることが出来ました。登録メンバーが48名、付添い及び送迎が延べ30名、コース沿いの役員（双葉、敷島の通過に伴って）や大会本部役員、安協、婦人会、教育委員会、甲斐市陸協、学校

関係者と、甲斐市からだけでも数え切れないほどの人たちが関わっています。

君らが生まれるずっと前の、昭和27年からやっている大会です。途中、交通事情などで12年ほどの中断がありましたが、甲斐路国体開催もあり、関係者の熱意によって再開されました。これからもずっと続くように願っていますが、こんな厳しい時代になって、大会運営そのものが大変さを増すばかりです。走る君らに出来ることは、しっかり自分のレベルを上げる努力をして、山梨全体の競技力を上げていくことです。そうすることによって、いろんな立場の人たちからの協力が得られ、この大会を続けていくことが可能になるからです。

大会本部役員は、今大会が終わったら早速次の大会に向けて動き出します。何ヶ月も前からコースを車で走り、道路工事関係者と何度も打合せをして安全な大会運営を目指しています。中継所の設営や駐車場確保、周辺事業所や住民へのお願いなど、目に見えない雑用が驚くほどたくさんあります。山の中のコースは、地元の役員の方々が落ち葉を掃いたりしてくれてるんですよ。感謝の気持ちを忘れずに、自分に出来る努力を精一杯しましょう。

この話は、ホリさんが2日間、車の上や沿道で見たり聞いたりしたことのまとめです。今年は2チームになって、どのようにしようかととても迷ったけど、小説を書くわけではないので、いつもの通り『ひとり語り』でいくことに決めました。だから、ほとんど見ていないBチームについては結果のみとなりました。一生懸命走ってくれた選手には、ほんとに申し訳ないと思っています。でも、又聞き、臨場感のない話を読んでも、きっと本物の汗は伝わりません。返って失礼だと考えたのです。

次こそ、というのは毎回繰り返されてる言葉だけど、君らが元気で走り続け、春からのいろいろなレースで、どの大会も、『**赤い甲斐色**』に染めていくのを楽しみにしています。そしてまた12月になったら、『甲斐市』の名の下に集結して、熱い熱いタスキリレーをしよう。

選手及び関係者のみなさん、本当にありがとうございました！

炎の甲斐市チーム　ホリさんでした！



こんないいメンバーが揃ってる時に結果を出したいねえ